

1 特別企画

東日本大震災 被災地の教師と生徒の想い

6 特集

つなげる
中学校と高校の指導〈前編〉

8 現状把握 中学校と高校の間にはどのような段差が存在するか

14 座談会 中高それぞれが目指す
「自立」と「学習の連続性」を明確に意識する

岡山県立鳥城高校教頭◎杉山義則

岡山県立勝山高校教頭◎三浦隆志

岡山県岡山市立福南中学校◎藤原昭雄

18 指導変革の軌跡

18 三重県立 四日市高校

学習習慣の定着◎学習記録や面談などの手を掛ける初期指導で信頼して学べる学校に

22 埼玉県・私立大宮開成中学・高校

進学校への転換◎教師の意識の統一と指導力向上の工夫で生徒の自学自習を促進

26 30代教師の「転んでも起きる!」

進路を実現させられなかった悔しさから「授業で勝負」に挑み続ける
大分県立大分舞鶴高校◎田所 伸

28 生きたデータの徹底活用

生徒の「やる気」を生かす3年生夏休み前の意識付け

32 未来をつくる大学の研究室

太陽系の形成過程を分析し、他の惑星系の惑星や生命の研究に生かす
東京工業大大学院 理工学研究科地球惑星科学専攻 井田茂研究室

36 大学選択 新たな視点

学問と社会の関連を意識させ学習意欲を高めている理工系学部

44 特別企画

全国の先生方から被災地の高校へ／ベネッセ東北支社社員より

この震災で高校生が今できる、もう一つの大切なこと。考え、伝えよう。



Highschool Rainbow Project

第1回「震災でわたしが考えたこと」

全国の高等学校のご協力で、高校生がこの震災で考えたことを意見文として集めました。
高校生のココロとアタマに大きな変化が起きています。
ぜひご覧いただき、先生方・生徒様へもご紹介いただければと思います。

6月中旬より公開

●先生向け
Benesse® High School Online
●生徒向け
Benesse® PT&JON

VIEW 21

2011
June

6 月

高校版
Volume

2

本文中のプロフィールは
すべて取材時のものです。
本文中敬称略。
本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます。

東日本大震災 被災地の教師と生徒の想い

～震災があっても変わらないもの～

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、

東北地方の太平洋沿岸部をはじめ広範囲に

甚大な被害をもたらした。

『VIEW21』編集部では、

4月18日から被災地の高校6校を訪問した。

訪問校（訪問順）

4月18日／宮城県気仙沼高校、岩手県立大船渡高校

4月19日／岩手県立高田高校

4月20日／岩手県立釜石高校、岩手県立宮古高校、岩手県立宮古商業高校

被災地の高校の教師と生徒は

震災下の学校で何を思い、考え、

そしてどう動いたのか。厳しい状況の中でも、

次代を担う生徒とともにあろうとする教師の言葉でつづる。

お話を聞かせてくださった先生方に改めてお礼申し上げます。

◇岩手県立釜石高等学校 平成23年度1学年通信◇

SCRUM

平成23年4月18日発行

1

1年生の皆さん、いよいよ新生活のスタートです。皆さんがしっかりと、またスムーズに高校生活を送っていただけるように、1学年では学年通信「SCRUM（スクラム）」を発行し、情報を提供・発信していきます。この第1号では、皆さんに書いてもらった「高校生活の抱負」から、一部を紹介し、一緒に高校生活を送ろうとしている仲間たちは、何をどのように考えて今ここにいるのでしょうか。読んでみてくださいね。

私には釜石高校の生徒になって頑張りたいことが三つあります。

一つ目は、中学校から続けてきた「無遅刻・無欠席・無早退」を高校でも継続させることです。私はこのことを実行することによって、より健康的な高校生活を送れると思っています。

二つ目は、勉強と部活動の文武両道を目指すということです。高校の勉強は中学校の勉強とは量も内容も進むスピードも速いので中学校の時のように、部活動ばかりに集中してしまうと勉強の方で遅れをとってしまいます。私は、そのようなことにならないようにその週にやった勉強内容は週末にまとめて復習したり、次の週の分の予習をしたりして勉強に遅れをとらないようにしたいと思っています。そして、自分のできる範囲での文武両道を目指していきたいです。

三つ目は、たくさんの機嫌で積極的にチャレンジして資格を取得するということです。……将来のためにも、……たくさんの資格を取得したいと思っています。

私はこの三つのことを目標に掲げ高校生活を送りたいと思っています。そして……今回の震災でたくさんお世話になった地域の方々や被害を受けた釜石のために少しでも恩返しができるように……地域のために働きたいです。そのためには高校生活の三年間は目標に掲げた事を守って、勉強・部活動共に頑張りたいです。

（Aさん）

高校では、集団の中でうまれることなく、自分の役割を見つけ出し、行動できるようにしたいと思います。中学校の卒業式の日、担任の先生が「今、君達ができることは、しっかりと高校に通って勉強することだ」とおっしゃいました。入学したら、勉強も部活動もしっかり取り組み、釜石の高校生は災害なんかには負けではないということを示

していきたいと思っています。そして、周りの人達のために行動できる人間になりたいと思います。

（Mさん）

東日本大震災が起き、避難所で物事を冷静に考えてみると、高校は勉強も難しいし、大変な事が沢山あるのではないかと思います。そして大きく遅れた卒業式で、先生に「これからの釜石を建て直すのは、君達だよ」と言われました。そこで僕は気付きました。僕達が社会に出るのは、すぐ先なのだ。……ここであんなにだけ頑張ったら、近い将来必ず困ることになる。そうなら釜石の再建に貢献できなくなってしまう。高校からは「頑張らなければいけない」という事なんだ。そう思い、自分の考えを改めることができました。……この3年間をだらだら過ごすか真面目に過ごすかで、大学への進路、そして社会人としての生活に影響が出てくるので、少し前まで僕が思っていたなんとも頑張るのではなく、目標を持って、勉強も部活動も真剣に取り組んで、充実した3年間を送り、充実した人生を送れるように頑張っていきたいと思っています。

（Kくん）

常に感謝の心を持って生活することです。……僕は、常に感謝の心を持って生活し、ありがとうを言葉にして、高校生活をおくりたいと思います。

（Rくん）

私は中学校で大抵の事を中途半端に過ごしました。あらゆる事を面倒くさがり、その場しのぎで適当でした。……高校では勉強を絶対に中途半端にしないです。……帰宅してからの時間の過ごし方が重要になってくると思うので、有効に使いたいと考えています。週末など普

釜石高校1学年通信「SCRUM（スクラム）」第1号の一部。
入学したばかりの生徒が、高校生としての決意を書いた。
震災の中で気付いた周囲の優しさへの感謝の言葉とともに、
次の時代に向けて復興を担っていこうという決意の言葉が並ぶ。

厳しい現実と向き合う

「津波が町を襲う瞬間を目にし、家族の安否も分からない中で257人の生徒は取り乱すことなく、野球部の雨天練習場で避難してきた人たちのために行動してくれました。そんな生徒を私たちは心から誇りに思いました」（高田高校）

校）

家を失い、家族を失った。

こんなときに勉強など

始めているのだろうか

太平洋沿岸部の高校は、学校再開の道をゆっくりと歩き始めていた。数日前に入學式・始業式を行ったばかりの高校、5月の登校開始に向けて準備をする高校とそれぞれ状況は異なる。だが、落ち着いて過ごせる時間と場所を早く生徒に与えたいという教師の思いは同じだ。

「ここでやっと泣ける」

避難所で暮らすその生徒は
担任の前で初めて涙を見せた

既にいくつかの高校は、4月上旬から教室を自習室として開放していた。だが、いずれの高校も「多くの生徒、そして多くの教師が家族や家を失った。避難所からの登校にバスで2時間以上掛かるような生徒もたくさんいる。そもそも教科書もない。こんなときに、勉強など始めているのだろうか」と悩みながら、

生徒の「居場所」をつくる準備を進めてきた。

「生徒の多くは気丈に振る舞っています。しかし、学校で心許せる担任と二人きりになって『やっと泣ける』と初めて涙を見せる生徒もいます。避難所でも家族の前でも気を張っているからこそ、学校が本心をさらけだせる場所にならなければと実感しました」（宮古高校）

避難者、復旧に当たる自衛隊員、全国からのボランティアの姿によって、校内の風景は大きく変わった。それでも教室に入れば、クラスメートや教師と語り合い、勉強するという当たり前の時間を取り戻すことが出来る。

「高校生として当たり前の時間を過ごすことで、疲れた心を癒やしてほしいのです。部活動もその一つです。スポーツなどで思い切り体を動かして、エネルギーを発散させることが、以前の生活に戻るきっかけになるような気がします。今ほど高校生にとつての文武両道の大切さを実感したことはありません」（気仙沼高校）

「高校生として当たり前の時間を過ごさせてい」と教師は皆一様に口をそろえる。大きな被害は免れた生徒であっても、震災が生み出した厳しい現実と直面していることを知っているからだ。例えば、生徒には校内の避難所でボラン



大船渡東高校同窓会館につくられた高田高校の臨時職員室。



沿岸部の多くの学校は、校舎の一部が避難所になっている。（写真／EPA＝時事）



3階まで浸水してしまった高田高校の校舎。（写真／時事）

どんなに苦しくても
生徒のためにやめてはいけない
取り組みがある

ティア活動をする者も多いが、長引く避難所生活に心身ともに疲れた人々から不平不満をぶつけられることもあるという。「避難所に届いた食料を小さな子どもに優先して与えていた生徒が、大人から『分配が公平ではない』と文句を言われたこともあった。10代には荷が重い、経験しなくても良いことまで生徒に経験させてしまっているのではないだろうか」。

誰もが生きることだけで精一杯な状況の中で、けなげにボランティアに励む生徒の姿を見ながら教師たちは自問する。

だが、「当たり前前の時間」が遠ざかり、目の前の現実戸惑っているのは実は教師も同じだ。「約1か月の授業の遅れを取り戻すために、ぐいぐい引っ張っていくべきか、じっくり見守るべきか、生徒一人ひとりが現状をどう受け止

ゼロではなく、
マイナスからのスタート
それでも夢は諦めさせたくない

めているかを見極めてからでないと決められません。しかし、私たち教師も、1か月の混乱を乗り越え、生徒に向き合う感覚を今、なんとか取り戻そうと努力している最中なのです」(大船渡高校)

被災体験との向き合い方も生徒によって異なる。そのことが指導を難しいものになっている。

「『こんな怖い目に遭った!』と友達と声高に

被災体験を語り合うことで心の傷を癒やそうとする生徒もいれば、まだ言葉に出来る段階にはなく、そんな話を耳にするのもつらい生徒もいます。同じ教室にいるそうした生徒に、私たちはどう接すれば良いのか。結局は生徒一人ひとりをみていくしかない。教師全員がすべての生徒の担任になったつもりできめ細かく接するしかありません」(宮古商業高校)

教師全員で……。その思いは高校の枠を超えたつながりにおいても同じだ。

「毎年、岩手県沿岸部の高校が集まって進路指導に関する勉強会を行っています。今年も5月に予定通り実施します。震災で被害を受けた学校同士がフォローし合い、チームとして難局を乗り越えるため、中止や延期をせず、行うべきだと考えました。どんなに苦しくても生徒のためにやめてはいけない取り組みがある。これもその一つだと確信しています」(大船渡高校)

入試を控える3年生の表情からは、焦りが痛いほど伝わってくるという。未曾有の震災をどう乗り越え、入試と向き合うのか。教師たちも初めての体験の中で模索を始めたばかりだ。

「ライブは全国の受験生であり、既に大きくリードされていることは教師も生徒も理解しています。ゼロではなく、マイナスからのスタートですが、それでも生徒には夢を諦めさせたくない。『震災があったから夢がかなわなかった』と言わせたくないのです」(釜石高校)



気仙沼高校の廊下には、全国の高校から寄せられた応援メッセージが掲示されている。



大船渡高校の校内には、全国からの支援物資が並ぶ。



水没し、破壊された校舎から、教師がのぼりを探し出し、校門の代わりに立てている。

明日の希望を見つめる

学校現場の混乱と戸惑いの中、授業は満足に出来なくても、生徒たちは多くのことを学んでいることを教師は感じ始めているのも確かだ。

「これまで『自分は何がしたいか』という視点だけで進路を語っていた生徒が、家族や地域のために何が出来るかという視点で進路を語るようになりました。厳しい現実を受け止めて自分の力としている彼らを見て、生徒の夢をかなえることが私たちの使命なんだと改めて実感しました」(気仙沼高校)

中には、住む家を失ったり、保護者が職を無くしたため、家族に経済的な負担を掛けないよう進路を変更する生徒もいる。

もはや「授業中心」ではない
「授業命」だ

「志望を変更せざるを得ない生徒が出てきています。大人の方がまず厳しい現実の前で途方に暮れています。子どもたちは大人以上に冷静に状況を察し、自らの進路を変えようとしています。しかし、今は『待つこと』なのだと思います。経済的支援策など、今後状況は必ず変わる、変わらなければいけないのだ

と思います。『結論を急ぐな』と生徒だけでなく、教師たちにも伝えていきます。祈るような気持ちでそう話し続けています」(宮古高校)

生徒が希望を捨てずにじつくりと進路を考えられるよう、教師たちはこれまでの指導方法にこだわらず、生徒の状況に合わせて変えていかなければならぬと考えている。

「避難所生活を終えて親戚の家に身を寄せる生徒もいますが、その家でも水はまだ出ないし、電気もつかない。もちろん自分専用の部屋も机もない。とても落ち着ける状態ではない生徒に、これまでと同じように『しっかり家で予習復習をしてきなさい』とは言えません。もはや『授業中心』ではありません。『授業命』の覚悟で私たちは教壇に立ちます」(高田高校)

教師の『授業命』の覚悟は、決して焦りではない。授業の質を問い直す冷静な覚悟だ。

「教科書がそろっていない今は、それぞれの教科の魅力、学びの面白さを伝える授業が出来ないか、突き詰めて考える良い機会です。授業の遅れも焦って取り戻そうとするのではなく、3年生であれば入試までの授業計画をきちんと説明し、教師も生徒も先を見通した上で授業に臨みたいと考えています」(釜石高校)



←岩手県立宮古高校・吉田達行先生



←岩手県立高田高校・左から村上愛先生、大関真人先生、滝川小百合先生



←宮城県気仙沼高校・左から千田健一教頭、庄子英利校長、佐藤忠司先生

→岩手県立宮古商業高校・左から佐藤直子先生、菊地龍幸校長、菅原一志先生



→岩手県立釜石高校・左から平田修先生、高橋篤志先生



→岩手県立大船渡高校・左から切田壮先生、平田勝彦先生



授業の遅れは、決して楽に取り戻せるものではないが、生徒がいる限り、諦めることなど出来ない。教師の心の中にあるのは、覚悟だけだ。

「生徒全員の夢を大切にしたい。私たちのその思いは震災があっても変わりません。2011年度入試で、本校は国公立大進学者数が開学以

生徒一人ひとりの夢を大切にしたい
だからこそ次の入試でも私たちは
言い訳を探すことなく挑みたい

来最多となりました。12年度でも、必ずその数を超えたい。言い訳を探すこ

となく、一人ひとりの夢の実現の結果であるその数を超えることに挑んでいきたいのです」(宮古高校)

地域への使命も教師たちは強く感じている。

「本校は校舎がすべて水没したため、隣の市にある、統合された高校の旧校舎で授業を再開します。地元から離れることになっても、地域の高校としてのアイデンティティーを持ち続け

少しずつ、しかし確かに

町は復興の途にあることを

生徒と確かめ合いたい

ることが出来るか、

大きな課題です。甚

大な被害を受けた地

元が復興するために

は、何としても本校が地元の学校として存続し、地域の人々の希望の一つになりたい……そう願わずにはいられません」(高田高校)

復興にどれだけの時間と忍耐を要するのか。

延々と広がるがれきの町に立って、その問いに答えられる者は、一人もいないように思われる。

被災地の新1年生の言葉

～釜石高校1学年通信「SCRUM (スクラム)」より～

3 月11日の大震災を通し、「人とのかわり合いの大切さ」を身をもって知りました。未知の世界である高校生活の3年間。私は私に出来ることをおっくうがらず、怖がらずにこなし、困っている人や助けを求める人に対して、自ら進んで手を差しのべられるような人間になりたいです。

各 地の、いろんな人たちが自分から進んで、物を譲ったりしているのを見て、とても感動しました。自分からも進んで何かを出来るような人になるために、日頃からどんなに小さな事でも、出来るように全力で頑張りたいと思います。「される人からする人へ、助けられる人から助ける人になる」ということも高校生活の抱負に加えたいと思います。

高 校生活の抱負や不安はたくさんあるが、自分が踏み出さない限り始まらない。自分の生活を良くするのも悪くするのも自分だ。このような状況の中、明るい未来をつくるためには、自分の進むべき道をしっかりと見つめ、それに向かって努力していかなければならないのだと思う。

豊 かで実りの多い高校生活を支えるために、校内でも校外でも品格のある、信頼される高校生になりたいです。そのために、先輩、後輩、男女区別なく明るくあいさつし、身だしなみは日頃から整え、早寝・早起き・朝ご飯の「生活スタイル」を確立したいです。先が見えない不安に押し潰されそうになるけれど、こんな時だからこそ夢を持って頑張りたいと思います。大震災で失われた命の分まで強く生きていきます。

高 校生活の中で「人のために生きる」自分を形成したいと思っています。そのためには、一般教養にあたる基礎学力と、部活動で養う健全な精神と肉体とが必要だと思います。そして、生きていることに感謝し、助けを求める声には何の見返りも考えず手を差しのべられる強さを身に付け、町を復興させる力のある高校生になりたいです。私は私に出来ることを進んで行い、仲間とともに高校生活を過ごしていきたいです。

※文意を変えない範囲で原文を編集しています。

「テレビの映像では何も変わっていないように見えるがれきの山も、少しずつ、しかし確かに片付いています。ゆっくりとではあっても町は復興の途にあることを、そして私たち一人ひとりに出来ることが必ずあることを、生徒と確かめ合いたいです」(宮古商業高校)

小さな一歩を見逃さない。そして、生徒と共にその一歩の中に希望を見出す。高校教師がこれまで大切にしてきた「教育」が今、震災の地で一層大きな価値を持つようとしている。

特集

SPECIAL ISSUE

つなげる

中学校と

高校の指導

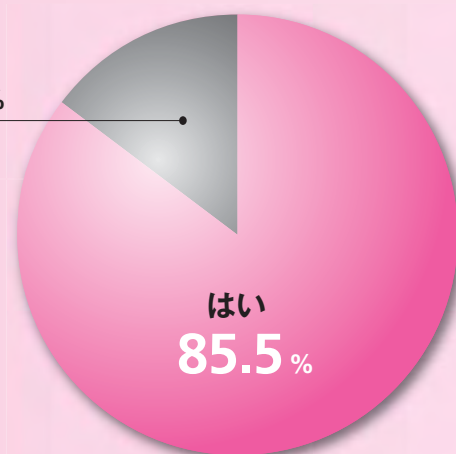
〈前編〉

『VIEW21』では、「中高接続」をキーワードに今号から2号連続で特集する。

6月号では、中学校と高校の違いと克服すべき課題を、調査結果と教師による座談会を基に整理する。

中高接続や中高連携に関して指導上で課題を感じる場面はありますか？

いいえ 14.5%



出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは2011年2月に実施。Web 及び用紙を郵送し、Web にて回答もしくは、ファックスで回収。有効回答数は62。

中高接続に課題を感じる教師が大多数を占めている

1 調査結果から見る中学校と高校の違い

【P.8～13 現状把握】

◎中高における、生徒の学習や社会に対する意識、教師の指導に関する違い(抜粋)

項目		中学校	高校
生徒	学習状況	通塾率(成績・高校偏差値層別)	55.6%(上位) > 28.1%(進学校)
		平日の家庭学習時間 (成績・高校偏差値層別)	65.4分(上位) 88.5分(進学校上位) 53.5分(中位) 75.8分(中堅校上位) 41.2分(下位) 30.8分(進路多様校上位)
	授業中の様子*1	授業中にいぬわりをする	31.0% < 69.5%
		近くの人とおしゃべりをする	60.1% > 45.4%
	好きな授業の形式*2	先生が黒板を使いながら教えてくれる授業	76.4% 82.9%
		パソコンを使ってする勉強	79.6% > 52.3%
教師	社会観や価値観*3	いい友だちがいると幸せになれる	92.5% 96.3%
	教科等担任授業時数	週当たり	14.9時間 13.7時間
	授業時間の使い方*4	教師からの解説の時間	23.7% < 48.0%
		生徒の発言や発表の時間	46.9% > 24.5%
	指導観*5	教科書や指導要領の内容を、とにかく最後まで扱うこと	70.8% > 30.6%
		一通り終わりまでやれなくても、基本的な考え方を身につけさせること	29.2% < 69.4%
	指導力向上のための取り組み*6	管理職からアドバイスをもらう	49.2% > 24.7%

* <> は10ポイント以上の差があるものを示す

*1「よくある」+「時々ある」の% *2「とても好き」+「好き」の% *3「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%

*4「多くするように特に心がけている」の% *5 無回答・不明を除いて算出 *6「よくする」+「ときどきする」の%

2 違いを踏まえて中高接続を考える

【P.14～17 座談会】

視点1

中学校と高校が目指す「自立」は同じではない

- ・中学校が目指す生徒の「自立」は、保護者からの自立
- ・高校が目指す生徒の「自立」は、進路と学習の面での自立

視点2

中学校までの学習歴を踏まえ、中高での教科指導の段差をなくす

- ・中学校は、高校での学習内容を意識して授業を行う
- ・高校は中学校で「どのように学んできたか」を確認する
- ・中高がそれぞれの学校へ出向き、教室の雰囲気や授業を見合う

次号(9月号)特集「つなげる中学校と高校の指導(後編)」では、指導の接続について、各校の実践例などを紹介

現状把握

中学校と高校の間には どのような段差が存在するか

中学校と高校はそもそも何がどのように違うのか、調査データなどを基に、さまざまな視点からその差を検証する。

1 文部科学省の統計から見る中学校・高校の違い

**中学校の数は高校の2倍だが、
教員数はほぼ同じ**

中高接続の課題を検討する上で、まず、中学校と高校の違いを把握しておきたい。まずは文部科学省の統計資料の数字を見てみよう。

学校数を見てみると（図1）、中学校は1万815校、高校は5116校であり、中学校数が高校数の約2倍である。学級数も同様に、中学校が高校の約2倍の数となっている。全体に占める私立学校の割合は、中学校が約7%であるのに対し、高校は約26%だ。一方で、

教員数は中学校と高校でほぼ同じ数だ。

次に教員の男女比を見てみると、女性教員の比率は、中学校は41.9%、高校は29.4%と大きく差があることが分かる（小学校は女性教員が62.8%）。

学歴構成では、中学校は大学院出身者が5.8%であるのに対し、高校では12.3%を占める。

また、1週間当たりの授業時数は、中学校が14.9時間、高校が13.7時間となっており、中学校の教員が平均して週当たり1時間授業時数が多いことが分かる。

図1 学校数・教員数・平均年齢・男女比など

	中学校	高校
学校数	合計 10,815 校	合計 5,116 校
	国立 75 校	国立 15 校
	公立 9,982 校	公立 3,780 校
	私立 758 校	私立 1,321 校
		*全日制課程、定時制課程
学級数	121,070 学級	64,200 学級 *全日制課程、定時制課程・本校、分校計（公立の本科）
教員数	250,899 人（本務者）	238,929 人（本務者）
女性教員比率	41.9%	29.4%
平均年齢	43.8 歳	45.1 歳
	男性 44.8 歳	男性 46.3 歳
	女性 42.3 歳	女性 42.0 歳
本務教員の学歴構成	大学院 5.8%	大学院 12.3%
	大学 88.0%	大学 85.5%
	短大 6.0%	短大 1.5%
	その他 0.3%	その他 0.7%
週当たり教科等担任授業時数	14.9 時間	13.7 時間

*文部科学省 H 22 年度学校基本調査／H 19 年度学校教員統計調査を基に編集部で作成

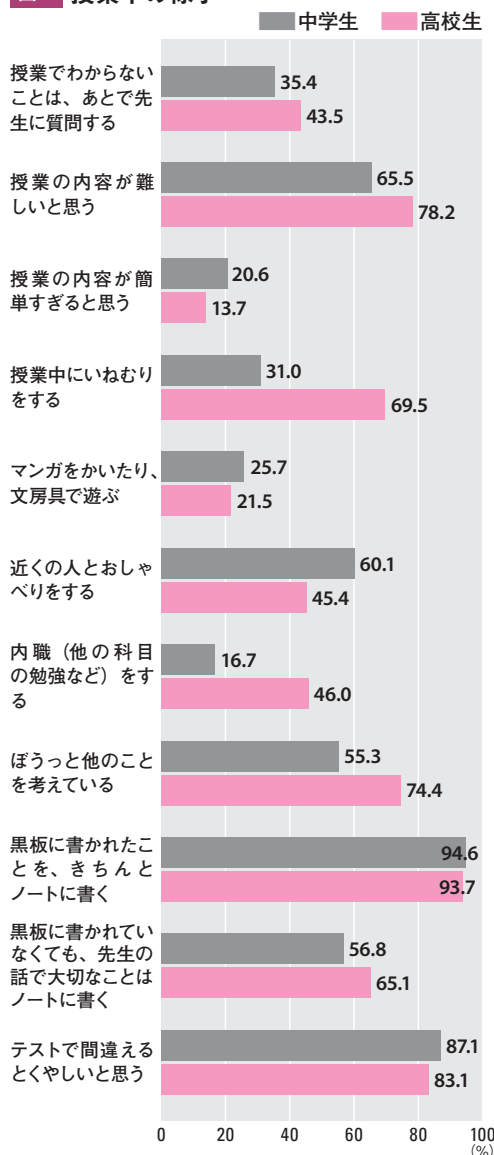
2 生徒の生活状況、学習や社会に対する意識の違い

努力に対する価値観が 中学生から高校生で低下

ここでは、中学生と高校生の違いを比較した。通塾率を見ると(図2)、中学生は高校生に比べ、割合が多い。中学生は成績下位層でも約3割の通塾率がある一方、高校では、進学校でも約3割であり、進路多様校では6・4%となっている。平日の家庭学習時間は中高共に成績や偏差値で大きく差があるが、進路多様校に通う高校生の学習時間は、中学生の下位層の学習時間の平均よりも少ないことが分かる(図3)。

また、授業中の様子を比較すると、高校生は「授業中にいねむりをする」「内職(他の科目の勉強など)をする」「よくある」「時々ある」と回答する割合が多く、中学生は、「近くの人とおしゃべりをする」の割合が多い(図4)。

図4 授業中の様子



注)「よくある」+「時々ある」の%

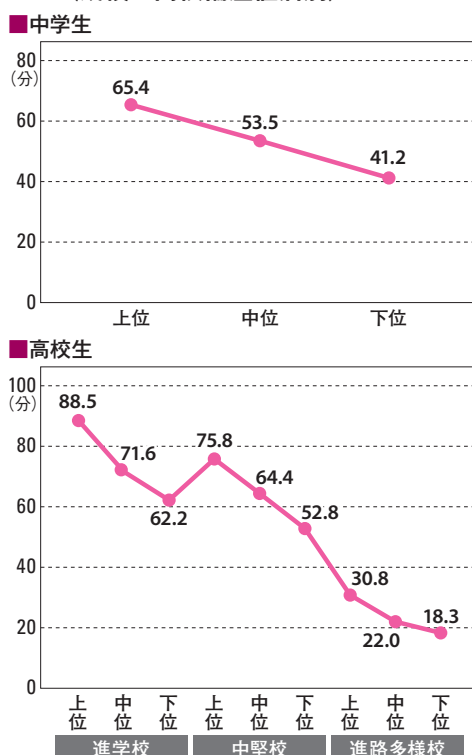
出典/Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」(2006年)

図2 通塾率(成績・高校偏差値層別) (%)

	上位	中位	下位
中学生	55.6	47.7	33.6
	進学校	中堅校	進路多様校
高校生	28.1	14.6	6.4

出典/Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(2009年)

図3 平日の家庭学習時間
(成績・高校偏差値層別)



注) 平均時間は「ほとんどしない」を0分、「3時間以上」を210分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した
出典/Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(2009年)

調査概要 「第2回子ども生活実態基本調査」

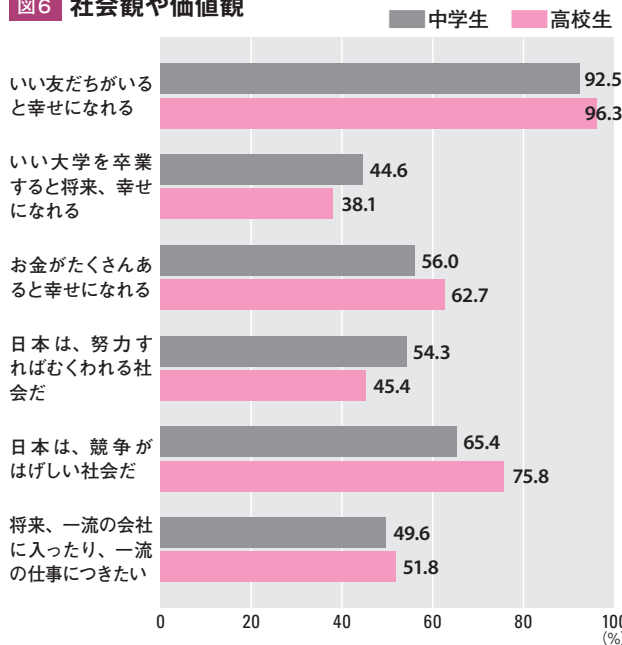
- 調査時期:2009年8~10月
- 調査対象:小学4年生~高校2年生。中学生は3,917人(12校)、高校生は6,319人(13校)
- 成績:中学生・高校生は国・数・理・社・英の5教科の成績の自己評価をそれぞれ5段階で回答してもらい、それらの結果を合計してほぼ3等分になるように「上位」「中位」「下位」を設定
- 高校偏差値:「進学校」偏差値60以上目安、「中堅校」偏差値50~59目安、「進路多様校」偏差値50未満目安

好きな授業に関する回答を見てみると(図5)、中学生が好きな授業スタイルは「パソコンを使ってする勉強」「友だちと話し合いながら進めていく授業」「グループで何かを考えたたり調べたりする授業」などであるのに対し、高校生では「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」の割合が他の項目と比較して最も多い。

また、社会観や価値観(図6)では、「いい友だちがいると幸せになれる」は差がなく、友だちの大切さは中高で共通であることが分かる。

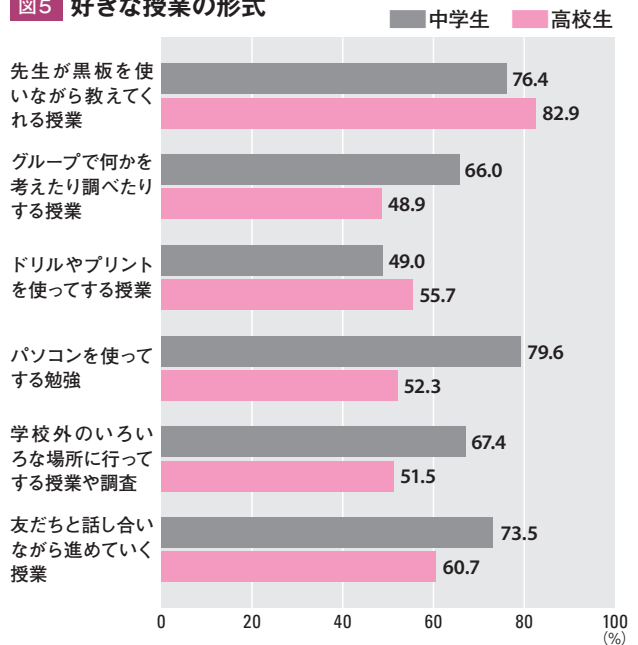
注目したいのは「日本は、競争がはげしい社会だ」という項目に「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した割合は中学生より高校生が多いことだ。一方で「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」は中学生44・6%、高校生38・1%、「日本は、努力すればむくわれる社会だ」は中学生54・3%、高校生45・4%といずれも中学生の方が多い。中学生から高校生にかけて、社会の厳しさへの認識は強まるが、努力することや大学進学に対する価値が相対的に低下していることが分かる。

図6 社会観や価値観



注1)「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%
 注2) 中学生・高校生共に30%未満の項目は省略
 出典/Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」(2006年)

図5 好きな授業の形式



注1)「とても好き」+「好き」の%
 注2) 中学生・高校生共に50%未満の項目は省略
 出典/Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」(2006年)

■調査概要 「第4回学習基本調査・国内調査 中学生版、高校生版」

- 調査時期：2006年6～7月
- 調査対象：全国3地域【大都市（東京23区内）、地方都市（四国の県庁所在地）、郡部（東北地方）】の中学2年生 2,371人、全国4地域【東京都内、および東北、四国、九州地方の都市部と郡部】の普通科高校2年生 4,464人

中高接続に関する

高校現場の課題

○中学校の段階までは学習に達成感を感じている生徒が多いように思うが、高校入学後は大学入試が念頭に置かれるためか、達成感が得にくいように思う。そうしているうちに「学びから逃避」してしまう生徒が多い。(宮城県)

○「勉強も部活もそこそこいい」という雰囲気を感じた最近の入学生に感じる。「勉強も部活もそこそこ」という高校の生活に順応できず、不適応を起こす者が徐々に増えてきたように思う。(静岡県)

○毎日の授業を中心に据えた学習習慣が身に付いていない生徒が多いため、高校入学後しばらくすると、徐々に学力の差が広がってくる。全ての生徒に「予習→授業→復習」の習慣化を徹底することが課題だ。(新潟県)

○目標の高校に合格するために最低限必要な勉強はしてきているが、それ以上に学力を身に付けようと思っている生徒が少ない。また、高校入学時点では将来の目標についてまだ考えられていない生徒が多い。(北海道)

3 教師の意識や指導に関する違い

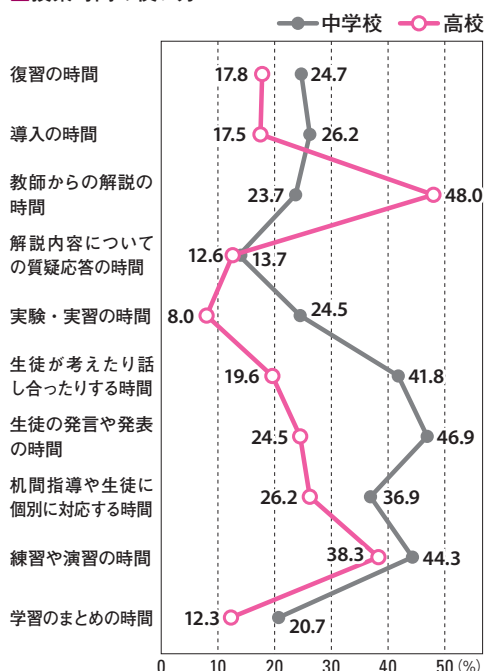
主体的に授業参加させる中学校、
教師からの解説が中心の高校

好きな授業の形式が中学生と高校生で大きく異なるのと同様に、中学校と高校の教師が心掛けている授業スタイルも異なる（図7）。中学校では「生徒の発言や発表の時間」「生徒が考えたり話し合ったりする時間」など、生徒が主体的に学習に参加する授業を心掛けているのに対して、高校では「教師からの解説の時間」や「教師主導の講義形式の授業」が重視されている。

指導観を見ると、中高共に「自発的に学習する意欲や習慣を身につけさせること」が「たとえ強制してでも、とにかく学習させること」よりも多く、自主性を育てることを大切に行っている（図8）。教育内容については、中学校が「教科書や指導要領の内容を、とにかく最後まで扱う

図7 授業時間の使い方・授業方法

■授業時間の使い方

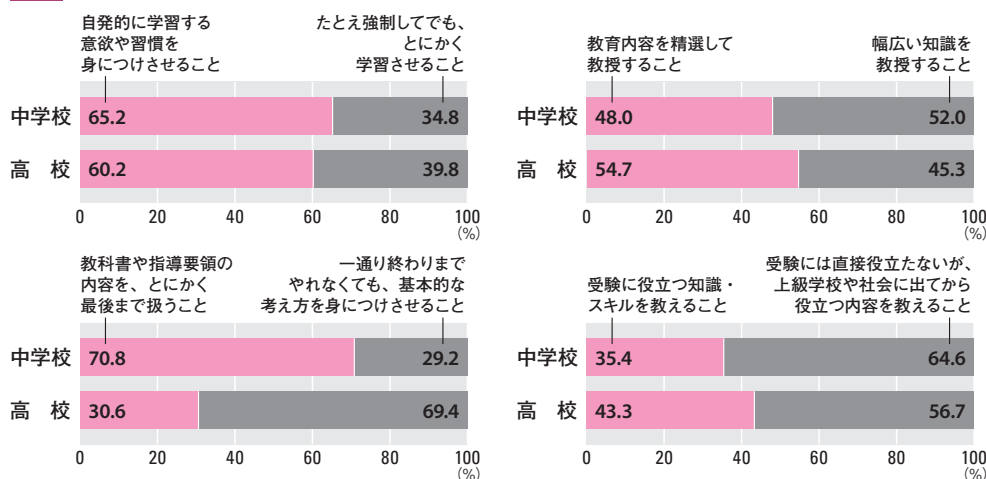


■授業方法

	中学校 (%)	高校 (%)
教師主導の講義形式の授業	9.6	32.5
教科書にそった授業	29.1	34.6
自作プリントを使った授業	35.6	36.0
教材を工夫した授業（具体物を使うなど）	43.5	26.8
自分で調べることを取り入れた授業	18.0	10.2
体験することを取り入れた授業	22.9	7.2
表現活動を取り入れた授業	36.5	11.5
個別学習を取り入れた授業	18.0	9.6
グループ活動を取り入れた授業	37.1	8.6
自由に議論する授業	11.2	5.8
教科横断的な授業や合科的な授業	4.2	4.4
計算や漢字などの反復的な練習	29.0	18.0
小テストの実施	33.8	31.0

注1) 「多くするように特に心がけている」の% 注2) < > は5ポイント以上、> は10ポイント以上の差があるものを示す
出典／Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」（2010年）

図8 指導観



注) 無回答・不明を除いて算出
出典／Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」（2010年）

こと」を重視しているのに対し、高校は「一通り終わりまでやれなくても、基本的な考え方を身につけさせること」を重視している。

図10の学校にいる時間を見ると、中学校教師の方が毎日約1時間、勤務時間が長い。

図11の指導上の悩みを見ると、「教材準備の時間が十分にとれない」は、高校に比べ中学の方が数値が大きい。「教育行政が学校現場の状況を把握していない」については中高共通の悩みだ。「小学校／義務教育段階までの学習内容が定着していない生徒が多い」「生徒の学習意欲が低い」「生徒間の学力差が大きくて授業がしにくい」といった生徒に関する悩みは中高の違いだけでなく、高校間でも、入学してくる生徒の状況によって大きく異なる。

平日の朝や放課後、土曜日等の取り組みを見ると（図12）「平日の朝読書」は中学校での実施率が高いが、「土曜日の学習、進路等の指導」「平日の放課後の補習、進路等の指導」は高校で圧倒的に高い。

指導力向上のための取り組みも、中高で違いが出ている（図13）。「校

図11 指導上の悩み

A（生徒の中学校時の評定平均4.5～5.0点） B（同評定平均3.5～4.0点）
C（同評定平均3.0点） D（同評定平均1.0～2.5点）（%）

	中学校	高校（普通科のみ）			
		A	B	C	D
教材準備の時間が十分にとれない	81.3	71.5	68.3	67.9	62.1
小学校／義務教育段階までの学習内容が定着していない生徒が多い	80.9	43.0	72.2	91.7	93.8
作成しなければならない事務書類が多い	76.9	73.9	72.7	75.3	68.9
休日出勤や残業が多い	73.2	74.4	69.4	64.9	47.4
生徒の学習意欲が低い	73.2	49.2	76.6	92.9	91.3
教育行政が学校現場の状況を把握していない	72.0	79.3	78.6	80.5	78.6
生徒間の学力差が大きくて授業がしにくい	71.0	45.5	57.6	74.9	77.6

注1）「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%

注2）中高それぞれ全体の平均が60%以上のものを抜粋

出典／Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」（2010年）

図12 平日の朝・放課後、土曜日等の時間の活用状況

A（生徒の中学校時の評定平均4.5～5.0点） B（同評定平均3.5～4.0点）
C（同評定平均3.0点） D（同評定平均1.0～2.5点）（%）

	中学校	高校（普通科のみ）			
		A	B	C	D
平日の朝読書	89.3	23.3	37.9	45.7	44.5
土曜日の学習、進路等の指導	4.5	85.0	71.1	47.8	25.3
平日の放課後の補習、進路等の指導	27.9	91.7	94.5	94.2	79.5
長期休業中の学習、進路等の指導	72.8	93.3	92.5	95.7	90.4

注1）「実施している」の%

注2）進路等の指導は高校のみの項目

出典／Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」（2010年）

図9 宿題の頻度・内容

A（生徒の中学校時の評定平均4.5～5.0点） B（同評定平均3.5～4.0点）
C（同評定平均3.0点） D（同評定平均1.0～2.5点）（%）

	中学校	高校（普通科のみ）			
		A	B	C	D
授業のたびに出す	25.6	25.6	22.5	14.4	9.4
授業2、3回に1回くらい出す	30.6	21.1	26.4	27.8	17.9
授業4、5回に1回くらい出す	18.1	11.0	15.8	13.6	12.3
月に1回くらい出す	9.7	8.9	12.3	11.4	11.7
宿題はほとんど出さない	14.7	31.3	21.4	32.1	48.7
無回答・不明	1.3	2.0	1.5	0.6	0.0

出典／Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」（2010年）

図10 学校にいる時間

	中学校	高校
1日の平均時間	12時間3分	11時間16分

出典／Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」（2010年）

中高接続に関する

高校現場の課題

例えば、中学と高校の英語の教科書には大きなギャップがあると思う。それを埋めるブリッジ教材をどのように開発するか、そして中学の復習をどのように行うかといった課題がある。（香川県）

入試だけでなくその先を見通した教科指導を行うために、いつものような内容を、どういう教科でどう展開するかについて、中高共に十分に分析、共有する必要があると感じている。（佐賀県）

社会と自分を知ることが目的とした進路学習は、どの中学校でも取り組んでいると思う。ただし、高校ではそれぞれの中学校でどのような取り組みを行っているか把握できていない。そのため、高校でのスタート地点を定めにくく、組織的な進路学習に踏み切れないことが課題である。（福井県）

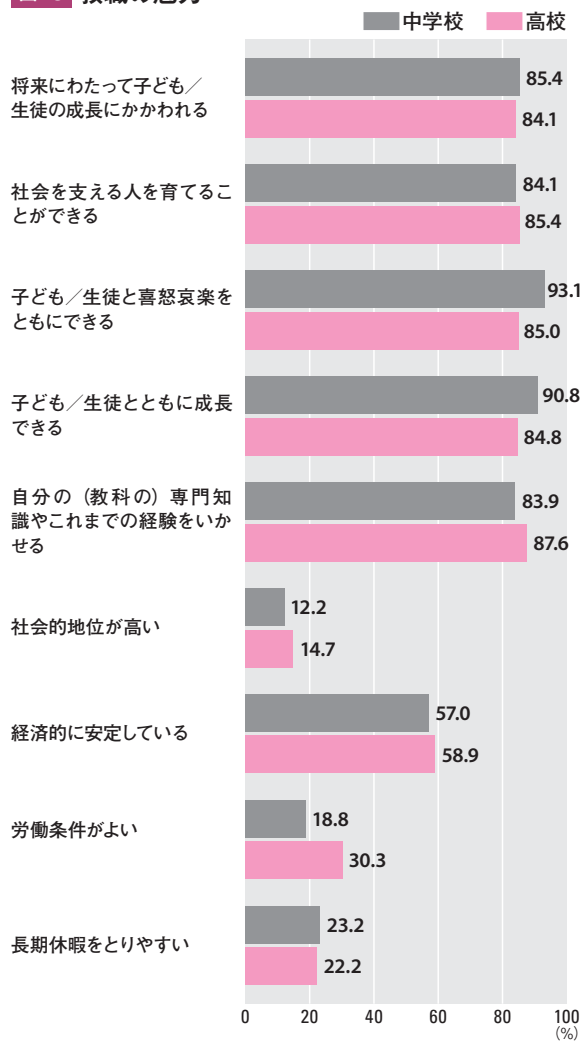
高校での指導のスタートラインを一定にすることが難しい。例えば出身中学校によって、国語の古典分野の扱い方が異なることがある。一定の予備知識を持っている生徒の興味を持続させつつ、「浮きこぼし」を作らないように導入期の指導をするのはなかなか大変である。（滋賀県）

内で教材・授業研究をする」は中高共に約8割と高いが「先輩・同僚からアドバイスをもらう」「管理職からアドバイスをもらう」「他校の教員と話し合う」は中高の差が10ポイント以上開いている。

校内での研修の回数(図14)は、中学校が年平均10・4回なのに対し、高校は約5回と半分程度だ。その内容は、中学校は「教科指導」が多いのに対し、高校はA・Bグループは「進路指導」、Cグループは「生徒指導」、Dグループは「教科指導」と、多く学校の状況によって研修内容はさまざまであることが分かる。

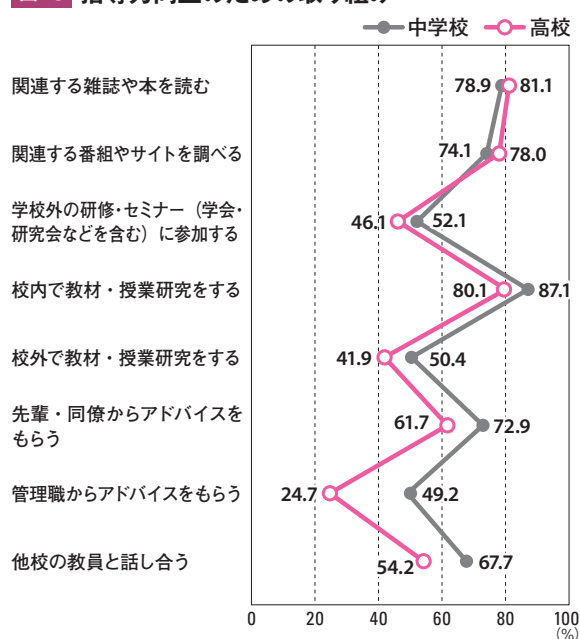
最後に、教職の魅力について確認すると、高校は「自分の(教科の)専門知識やこれまでの経験をいかせる」が一番多く、中学校は「子ども／生徒と喜怒哀楽をともにできる」が一番多い(図15)。それぞれの、番多い項目には違いが見られるものの、生徒の成長を見られること、社会を担う人材育成に貢献出来ることなどは共通した魅力となっていることが分かる。

図15 教職の魅力



注)「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%
出典／Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」(2010年)より抜粋

図13 指導力向上のための取り組み



注1)「よくする」+「ときどきする」の%
注2) 中高に共通する項目のみを掲載
出典／Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」(2010年)

図14 校内研修

		高校 (普通科のみ)			
		中学校	A	B	C D
今年度の校内研修の平均回数(回)		10.4	5.1	5.2	4.6 5.2
領域・校内研修の%	教科指導	78.9	55.0	47.2	47.1 55.4
	生徒指導	49.2	43.3	36.5	55.1 50.6
	進路指導	11.2	71.7	58.7	42.0 31.3

出典／Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」(2010年)より抜粋

調査概要 「第5回学習指導基本調査」

○調査時期：2010年8～9月

○調査対象：全国の公立小・中・高校の校長および教員。中学校…校長573人、教員2,827人。高校…校長830人、教員4,791人（うち校長調査と勤務校がマッチング可能な3,070人を中心に分析）

*国語・社会（高校は地理歴史・公民）・数学・理科・外国語のいずれかを担当している教員を対象に実施

中高接続の在り方とは

中高それぞれが目指す「自立」と「学習の連続性」を明確に意識する

中学校と高校の間にはどのような段差があるのか。二つの学校はどのようにに接続すればよいのか。進学校、進路多様校、公立中学校の教壇に立った経験を持つ3人の教師が、それぞれの視点で語り合う。

中学校と高校で異なる「自立」の意味

編集部 中高接続について感じられている課題を、中学校・高校それぞれの立場からお聞かせください。

杉山 高校生になって中学校と異なる集団に属し、仕切り直しが出来ることは、メリットになると感じています。以前の勤務校には国公立大志望者から就職志望者まで幅広い学力の生徒がいましたが、多くの生徒は「高校生になったのだから巻き返してやる」と決意を新たにしています。実際、高校生への切り替えがうまく出来た生徒は、どんどん伸びて

いきます。ただ、高校入学後に校内で成績下位層になった生徒の学習意欲をいかに引き出すかは、重要な課題です。たとえ進学校でも、授業が少し分からなくなっただけで高校の学習についていく気持ちを失ってしまふ生徒はいます。

三浦 公立中高一貫校に勤務した経験から、中学校の指導は母性的で、高校の指導は父性的だと感じます。中学校ではいろいろな教材を与えて教師が学習の仕方を細かく支援しますが、高校では生徒を自立した学習者にすることが目標です。しかし、全員がスムーズに高校の学習スタイルに移行できるわけではありません

ん。以前に比べ、高校入学段階から学習・生活習慣を手厚く見ていく必要を感じる生徒が多くなった気がします。

藤原 中学校でも「自立」は指導のキーワードです。ただし、それは学習面での自立ではなく、保護者からの自立を意味します。中学校における「自立」のイメージは、何でも保護者に頼っていた生徒が、保護者との衝突を経て、自分の進路について保護者と語り合えるまでになることです。そうになると普段の授業を集中して聞くようになり、教師への質問も本質を突いたものになります。しかし、そうした生徒もいれば、小学



岡山県立鳥城高校教頭

杉山義則 Sugiyama Yoshinori

教職歴27年。同校に赴任して1年目。担当教科は数学。岡山市立岡山商業高校、岡山県立邑久高校などを経て、現職。モットーは「教師は学びのコーディネーターであるべき」。

生と変わらないような生徒もいます。日々の指導ではどうしても上位層が放っておかれ、手の掛かる生徒が指導の中心になります。その意味



岡山県立勝山高校教頭

三浦隆志 Mura Takashi

教職歴29年。同校に赴任して1年目。担当教科は地歴・公民。岡山県立備前高校、岡山県立邑久高校、岡山県立岡山操山高校などを経て、2011年度より現職。モットーは「生徒と共に成長する」。

での生徒の自立の度合いの差は、近年どんどん広がり、教師はその対応に追われているように感じます。

杉山 生徒の二極化は高校でも実感しています。生徒の自立の度合いは、高校入学までに多様な経験を積んできたかどうかで大きく異なるように思います。ただ、中学時代は中間層に位置して目立たなかった生徒が、高校ではリーダーになって活躍することもあります。高校に入学して所属する集団が変わることによって、新たな可能性が生まれるのだと思います。

考える楽しさを体験できる 多様な指導方法が必要に

編集部 生徒の「自立」の二極化は、

日々の授業にも影響を与えているのでしょうか。

藤原 中学生について感じる変化は、興味や関心が広がりにくくなっていることです。携帯ゲームの発売日には関心があっても、ゲーム機の内部構造や、ゲームソフトの作り方には関心が向かない。だから、授業中に身近な話題で生徒の好奇心を刺激することが難しくなっています。

杉山 最近は高校でも似たような状況を感じています。数学の授業で、生徒が別解の説明を嫌がるようになったのです。簡単に正解にたどりつく方法だけを教えてくれればいい、と。これは、限られた時間で素早く的確に解く力が問われるセンサー試験の影響かもしれません。一つの大問をじっくり考えるような授業や、分からないことを楽しめるような授業をすることは、なかなか難しくなっています。

三浦 岡山県の高校入試では近年、

論述問題がやや多く出されるようになりましたが、それは「高校ではこんな力を育てたい」という高校側の決意であり、中学校や中学生へのメッセージでもあります。また、資料を読み解き、自分の考えを表現するPIISA型の問題も出されています。ドリル形式の勉強だけをしてきた生徒は戸惑うかもしれません。

藤原 公立高校の入試で何が問われているか、中学校でもきちんと分析しようとしています。私は、最近は定期考査などでも解答の過程を書く



岡山県岡山市立福南中学校

藤原昭雄 Fujiwara Akio

教職歴25年。同校に赴任して2年目。担当教科は数学。岡山市立御南中学校、岡山市立藤田中学校などを経て、現職。モットーは「誠実」。

問題を意識的に出しています。ただ、生徒はなかなか書けません。ノートも板書を写すだけで、教師の説明を聞いて新たに分かったことまでは書き加えられないのが現実です。だからといって、黒板に全てを書くのと、今度は書き写すのが追いつかない生徒が出てくる。考えながら書くことも勉強であることを生徒に分か

らせるのは簡単ではありません。

三浦 書くことが苦手な高校生は確かに増えました。自分の心の中は書けても、いろいろな意見や資料を参考に自分の意見をまとめ、表現することは難しい。だから、難関大の小論文対策はひと苦労です。

杉山 そう考えると、推薦・AO入試対策などで小論文の学習を経験した生徒は、それを契機に成長していく気がします。全員が時間を掛けて取り組めれば良いのですが、残念ながらそれは難しいのが現状です。

三浦 中高校生に限らず、今、若い世代は「コピー世代」などと言われるように、自分の頭で考え、表現する方法を身に付けていないよう

に思います。そのため、自分の頭で考えることによる成功体験を十分に味わっていません。成功体験を積ませるために、例えば、企業で用いられるような発想法を活用しながら、考える楽しさを実感できる授業を行うことを検討してもよいかもしれません。本来、高校の学習では多面的なものの見方を求めます。ならば、それをより意識した指導が、教師にも求められるのではないでしょう。教科書とチョークと話術で展開する一斉授業だけでは立ち行かなくなっていると、多くの教師は感じて

いるはずです。

杉山 私たちは、最終的には別解も含めて、一つの問題にじっくり取り組む高校生を育てたいのです。しかし、今の高校生にいきなりそれを求めるのは難しく、そこに至るまでには訓練が必要です。生徒が一人でじっくり考えられるようになるためにいろいろな方法を試したいと思います。私たち教師も今までの方法にこだわることなく自分の頭で考えることが求められているのです。

いっつどのように手を離し それぞれの「自立」へと導くか

三浦 授業を変えるためには評価の方法も検討する必要があると思います。高校は定期考査などで何点取ったか、つまり知識・理解が評価の中心になりがちです。その点、中学校は観点別評価が徹底されていると感じます。

藤原 そうですね。中学校では関心・意欲・態度をしつかり評価しています。また、自分の努力で確実に改善できるものに意識的に取り組ませるため、例えば、提出物を出そうとする態度をきちんと身に付けさせ

ています。ただ、その分、教師の支援も手厚く、提出物を忘れないように一覧表にし、生徒だけでなく保護者にも配布しています。

杉山 最近は高校でも、提出物を一覧にして保護者に配布しています。その点では、進学校であつても中学校の指導に近付いていると思います。高校生になったからといっていきなり手を離すわけにはいかないからです。ただ、いつまでも手を掛け過ぎると生徒は自立できません。いっつ、どのように手を離すのかはとても難しい問題です。

三浦 中学校、高校、大学と連続する中で、それぞれの自立の形があるのでしょうか。その中で高校生の自立とは、自分の目標を掲げ、それに合った学習を自分で進めることが出来るようになることだと思います。自立した生徒は短期間で驚くほど成績が伸びます。大切なのは、それぞれの学校段階での自立の形を追求することではないでしょうか。

杉山 今は、選り好みしなければ勉強しなくても大学に合格できる時代です。そういう意味では、自立すること自体が難しいといえます。しか

し、以前勤務した進路多様校では、卒業直後の生徒が主体的に高校に来て「このまま進学するのは不安だから」と自習に取り組んでいました。自分なりに将来を考え、目的意識を持つて自主的に勉強を始めたことは、自立の形の一つといえるでしょう。何のために学ぶのかを中学校、高校、更にその先と、考える機会を継続して与えていくことも、接続の大切な視点の一つだと思います。

新課程は 教え方を見直す良い機会

藤原 中高接続を考える上で、「教科指導」は外せない視点です。新課程はこれを超えるチャンスになると思います。中学校の新課程では教える内容が増えますが、授業時数も増えることで単元ごとの関連をしつかり教えられるようになります。担当教科の数学では、高校への接続が楽になるのではないかと思います。ただ残念ながら、移行期のカリキュラムは、生徒の理解の流れに沿っていない部分もあります。高校の先生方には学び直しを含めた支援をお願いしたいところです。

三浦 移行期を中心にこれから数年

間は、生徒が中学校の学習内容をどう学んできたかを十分に確認しないといけませんね。高校の教科書がこういう内容だから、それにつながる内容は理解しているはずだと思ひ込まないことが大切です。藤原先生がお話しされたように、中学校がどこで苦労しているか、高校側も勉強する視点は重要です。

杉山 どの部分の理解が不十分なのか、教師は生徒の様子から見取る必要があるでしょう。最近の生徒を見ていると、分からない箇所は読み飛ばして「なかったこと」にする傾向を感じます。分からないなりに考えたり調べたりすることが減っている、「分からない」という意識すら抜け落ちているようです。協同的な学習などを通して人に説明することで、自分の分からない部分に気付けるような場を作る必要があります。講義形式の授業にこだわらず、さまざまな手法が求められる。中学校の教育課程が大きく変わること、高校教師にとっても教え方を見

直す良い機会となるはずです。

藤原 中学校では高校に比べて協同的な学習を積極的に取り入れていると思いますが、そんな中でも、新課程の移行期間で生徒の理解が難しいだろうと予想される単元については、より意図的にそういった手法を活用しています。生徒同士のやり取りを通じ、理解していると思っていた生徒が実はよく分かっていなかったと発見できることも多いのです。

授業を見合うことから 接続の在り方が見えてくる

編集部 教科指導における中高接続を促すためには、具体的に何から始めれば良いのでしょうか。

三浦 最も大切なのは中高それぞれ授業を見合うことでしょう。お互いの授業の様子を見るだけで、生徒の理解の過程など想像と違うことがあるという発見できるはずです。

藤原 私はチームティーチングで高校の教壇に立ったことがあります。それによって、中学校の授業が高校の学習にどうつながるのかを生徒に

きちんと説明できるようにしました。高校へのつながりを意識して授業を行うことは、特に成績上位層を中心に大きなメリットがあります。

杉山 中学校を訪れると、掲示物などから教室の雰囲気も全く違うことに気付きます。こういう雰囲気の中で学んだ生徒が1年生になったらこんな指導をしてみようなどと、具体的なアイデアが出てくるはずです。

三浦 どんな雰囲気の中で生徒が育ってきたかを知することは、すなわち学習歴を知ることです。特に公立高校は地域に根ざした教育活動が求められます。生徒がどんな体験をしてきたのか、地域の文化の一つとしてもっと目を向けたいものです。

藤原 私たち中学校教師も、教科内容をはじめもっと高校のことを知るべきでしょう。お互いを知ることの違いもより鮮明になるはずです。何があっても生徒を受け入れることを原則とする中学校と、高校とではやはり生徒との距離は違います。違いを理解した上で、出来るだけスムーズに接続させる部分、段差として

しつかり際立たせる部分を見極めた

三浦 学習指導に関して「高校だからこうあるべきだ」と押しつけるだけでは、多くの生徒はついてこれません。ですから、学習面での段差はなるべく無くする必要があります。

一方で、高校進学を機に生活面をリセットしたいという生徒の気持ちを尊重するなら、中学校と高校は違うんだ、としつかり伝えるべき場面もあるはずです。高校によって生徒の状況はさまざまで、中高接続の形も千差万別のはずです。生徒の状況を見ながら、より良い接続の方法を考えていきたいですね。

次号予告 9月号は8月24日発行予定

つなげる 中学校と高校の指導 〈後編〉

新課程を踏まえ、中高をつなげる指導について、具体的な実践例を紹介する。



◎三重県第二中学校として創立、三重県立富田中学校、四日市高等女学校、四日市市立北高等女学校を1948年に統合して現校名となる。2002年に65分授業、2学期制をはじめとする改革に着手、03年にスーパーサイエンスハイスクールの指定を受ける。文武両道を目指し、部活動にも積極的に取り組む。

設立

1899(明治32)年

形態

全日制／普通科・普通科国際科学コース／共学

生徒数

1学年約360人

11年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、東京大13人、名古屋大30人、三重大40人、京都大23人、大阪大23人など計243人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、南山大、同志社大、立命館大などに延べ613人が合格。

住所

〒510-8510 三重県四日市市富田4-1-43

電話

059-365-8221

Web Site

<http://www.shiko.ed.jp/>

三重県立 四日市高校

学習習慣の定着

学習記録や面談などの 手を掛ける初期指導で 信頼して学べる学校に

変革のステップ

背景

◎入学生の学力に見合った進学実績を出せなかった。部活動を辞める者も多く、学校が求心力を発揮できていなかった

実践

◎学習記録、課題の工夫などにより生徒の学習習慣の定着を促し、同時に教師の目線合わせ、進路指導の体系化を図る

成果

◎生徒が学校を信頼するようになり、教師と生徒の距離が近くなった。教師の指導力の継承がなされた

学校の求心力の低下により 進学実績が伸び悩む

三重県立四日市高校は、旧制二中の系譜を引く県内屈指の伝統校である。国公立大合格者は毎年250人前後に上り、2011年度入試でも東京大、京都大、大阪大などの難関大に計100人以上が合格した。進路指導主事の中川剛先生は次のように話す。

「どの学年でも安定して実績を上げられ、新しく先生が入ってきても同じように指導できる。本校の指導スタイルがしっかりと継承されていると感じています」

同校が学校改革に着手したのは、10年ほど前のことだ。02年度、完全学校週5日制になったのを契機に65分授業と2学期制を導入し、進路指導計画の精緻化、初期指導の方法の見直しなどの諸改革を進めた。

背景には進学実績の伸び悩みがあった。95年に三重県の公立高校入試で総合選抜制度が廃止され、志望校選択の自由度が高まった。伝統校である同校には、相対的に高い学力の生徒が集まるようになったが、新入生の学力の上昇に見合うほどには大学進学実績が伸びず、地域の期待に応えきれない面があった。

また、学校の求心力が低下していたことも懸念材料となっていた。

「この地域は中学生の通塾率が高く、その

成功体験を持って高校に入学してきます。そのため、高校入学後も塾に頼りがちな傾向が見られました。塾があるからといって部活動を休んだり、2年生の秋には部活動を辞めてしまふ生徒がいたりしたため、活気の感じられない部もありました」(中川先生)

家庭学習の習慣が身に付いていない生徒も多かったが、「学校は二の次」という意識があるためか、教師の指導が浸透しにくい面もあった。結果的に進学実績は伸びず、学校全体が活気を失っていったのである。



中川剛 Nakagawa Tsuyoshi
三重県立四日市高校(11年4月から三重県教育委員会事務局教育総務室企画グループ主査)
教職歴22年。同校に赴任して14年目。進路指導主事。「バランスの取れた学校を目指したい」



近藤健 Kondo Takeshi
三重県立四日市高校
教職歴23年。同校に赴任して4年目。1学年主任。「視野が広く周囲に配慮の出来る人間を育てたい」



小林正典 Kobayashi Masanori
三重県立四日市高校
教職歴19年。同校に赴任して5年目。2学年主任。「何事にも関心を持ち、自分の考えを表明する生徒を育てたい」



原泰孝 Hara Yasutaka
三重県立四日市高校
教職歴20年。同校に赴任して5年目。2学年担任。「学校生活全てに本気で取り組む中で、個性の基となる基礎をつくってほしい」

「学習計画・記録表」を段階的に運用し 学習習慣の定着を図る

同校が力を入れたのは初期指導だ。まず、入学時に「総合的な学習の時間」や学習オリエンテーションで、各教科の学習法を「学習計画・記録表」(P.20図)を用いながら指導する。そして、生徒が自ら机に向かう家庭学習習慣がしっかり定着するよう、「学習計画・記録表」の使い方の目標を細かく設定し、段階的に指導を進めていく。その方法は次の通りだ。

- 4月 家庭で学習した実績を記入
- 5月 1週間分、または連休中の短期学習計画を立てさせ、出来た部分に○を付ける
- 6月 定期考査や実力試験前に、2〜3週間単位の中期学習計画を立てさせ、達成できた部分に○を付ける

同校では、毎月、定期考査や実力試験、校外模試など何かしらのテストを行う。試験2〜3週間前に「学習計画・記録表」を配り、テストを目標として、教科や問題集の学習範囲を1日単位で記入させる。担任は、学習時間や科目の偏りをチェックし、適宜アドバイスをして返却。生徒は毎日、計画に対して実際の学習時間を記入する。試験終了後には再度、担任が集めて達成状況をチェックする。

計画がうまく立てられない生徒には、手本となるような「学習計画・記録表」を見せて参考

にさせる。2学年担任の原泰孝先生は次のように述べる。

「本校の生徒は、友だちに負けたくないという気持ちが強くあるようです。他の生徒の学習法を見て、自分も同じようにやってみようと思う生徒は多いと思います。基礎問題に力を入れている生徒、同じ問題を繰り返し解く生徒など、さまざまな方法を見せるうちに、試行錯誤しながら自分なりのスタイルをつくり上げていくのです」

どのようにしたら生徒一人ひとりに家庭学習の意義が効果的に伝わるかも重視している。2学年主任の小林正典先生は次のように指摘する。

「自分に合った学習法をつかめていない生徒が多い中で、『1日3時間は勉強しないとだめだ』といくら声を大にして言っても、生徒は自分に向けられた言葉として受け取れません。面談などで生徒と向き合う場面を増やし、『学習計画・記録表』を基に個に応じた指導をすることで、意欲を高めて学習習慣の定着につなげていくことが出来るのです」

生徒の状況に合わせて 課題の出し方を工夫

計画的な学びを支援するため、週課題の出し方も工夫した。課題提出日を、月曜は英語と物

長期休業中の課題については、提出日を2日

国語、数学、英語、自分で決めた教科について、家庭学習で取り組む教材と単元、時間の計画を記入。毎日、実際に取り組んだ学習時間の実績を書き込み提出する。担任がチェックしてアドバイスを書き込んで生徒に返却。＊同校の資料をそのまま掲載

「3年生になる頃は、生徒自身が自分なりの学習に挑戦したいと思い始める時期です。たとえ失敗したとしても、自立した学習者になるにはそうした経験も大切です。ただし、8割は教師がしっかりと手綱を握り、残りの2

指導計画の具体化・共有化で
学年全体の指導力向上を図る

学校の求心力を取り戻すためにもう一つ同校が大切にしてきたのが、教師間の目線合わせである。同校では、早くから3年間を見据えた進路指導ストーリーを構築し、体系的な指導を行ってきた。ここ数年は、目標や計画だけでなく、実現のために教師と生徒が何をすべきかということろまで具体的に示し、実効性を高めている。例えば、1年生の4、5月は「学習習慣を付ける」を目標として学習オリエンテーションや個人面談などを行い、「成功へのアドバイス」として、「高校での生活習慣に切り替えること」で、スムーズな学習を目指そう」「夢に向かって努力できる仲間の存在に気付き、連帯感を深めよう」など具体的な目標を掲げた。教師にも、その目標を達成させるために必要な心構えや取り組みなどの「指導マニュアル」を示した。

「転任早々、3年生の担任を受け持った先生が『この学校は誰が来ても同じように指導できる』と話していました。時期ごとの目標に基づいて教師のすべきことが具体的に見え

るからこそ、安心して指導に当たれる。その結果、安定した進学実績を積み上げることが出来たのだと思います」（小林先生）

時期ごとに面談の意義を明確にし指導を標準化する

面談は単なる雑談や教師からの一方的な注意で終わらないよう、1年生の4月は「相互理解」、6月は「学習習慣の確立」、9月は「選択科目の決定」というように、時期ごとの目的を明確にしている。更に、担任の力量や経験によって指導に差が生じないよう、面談ごとに目的や内容、方法などをプリントに明記して担任間で共有し、面談の質と内容の標準化を図った。

例えば、1年生6月の面談では「中間試験において成績が芳しくなかった生徒や、スタディサポートで学習習慣が付いていないという結果の出た生徒を中心に行う」という目的を明示。その上で、生徒の状況をつかむために「生徒の話に耳を傾ける」「生徒の話を整理する」「生徒の問題点を考える」ことの重要性を述べ、「生徒に具体的なメッセージを出す」「長々と方法論を語らない」など進路指導部が中心となって具体的な手法を示す。

進路指導計画と同様、ノウハウを記したプリントも次の学年へと引き継ぐが、前学年の内容を全て踏襲する必要はない。その時々

の状態や課題に応じて変えていくことで、より効果が高まると同校は考えている。

「全てを押し付けてしまうと、先生方の意欲は高まりません。方針は統一しながらも、方法は学年に任せる。このバランスをうまくとることで、取り組みを形骸化させることなく効果的に運用できるのです」（中川先生）

「学力検討会」により学年の機動力が高まる

指導計画やノウハウの標準化は重要だが、それに頼り過ぎると生徒の変化への対応がおろそかになる。同校では月2回の「学力検討会」で、その時々

の課題について共有することによって、学年の機動力を担保している。

メンバーは、学年主任、学年の進路・教務担当者、国数英理地歴公民の教科担任だ。主に1か月半〜2か月後の指導計画、スタディサポートと模試の結果共有などがテーマとなる。先述した週課題の教科間での調整、面談内容の明示なども、この会議で発案・決定された。

「1か月後にインターハイの予選があるの

み込み、毎回メンバー全員が参加できるようにしています。取り組みが意味のあるものとして継続するためには、学年にかかわる全ての教師が責任感を持って指導に臨むことが重要で、それを実現するためにも真剣に討議する場は不可欠です」（近藤先生）

教師の手厚い指導により、生徒が学校に寄せる信頼は徐々に高まっている。自ら面談を希望する生徒や夏季講習の出席者は増え、通塾率は大幅に低下した。教師のアドバイスに耳を傾ける生徒が増えたことで、1年生から高い志望を持つ生徒も多くなった。

日常的にコンセンサスを取ることで教師の一体感が増したのも大きな変化だ。部活動顧問も学年の取り組みに理解を示し、生徒の課題の提出状況や試験の成績まで把握するようになった。部活動顧問と担任間の意思疎通が円滑になったことで部活動も活発になったという。

「生徒に文武両道を求めるのなら、学校がそれを実現できる環境を整えることが大切です。先生方の手厚い指導により、生徒も学習と部活動の両立に自信を持てるようになったのではないのでしょうか」（中川先生）

今後の課題は、大学に入ってから

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年9月号指導変革の軌跡「島根県立益田高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)



◎校訓は「愛・知・和 21世紀を担う調和のとれた人間教育」。最難関国立大を目指す「特進選抜・国立先進」、難関国立大・難関私立大を目指す「特進選抜・国立I類」、国公立大・難関私立大を目指す「特進選抜・国立II類」、難関私立大を目指す「特進S」「特進a」「特進β」の計6コースを設置。

設立

1959(昭和34)年

形態

全日制／普通科／共学

生徒数

1学年約500人

11年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は北海道大、東北大、千葉大、埼玉大、一橋大、東京工業大、首都大、東京、横浜国立大などに計41人が合格。私立大は慶應義塾大、上智大、東京理科大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ1041人が合格。

住所

〒330-8567
埼玉県さいたま市大宮区堀の内町1-615

電話

048-641-7161

Web Site

<http://www.omiyakaisei.jp/HS/>

埼玉県・私立
大宮開成中学・高校

進学校への転換

教師の意識の統一と 指導力向上の工夫で 生徒の自学自習を促進

変革のステップ

背景

◎1990年代に、2年連続で定員割れとなる。高卒者の大学進学率向上に伴い、進学校への転換を図る

実践

◎徐々に普通科の割合を増やし、カリキュラムを変更。併せて、コースごとに「マニフェスト」や「VIS」を設け、教師の意識を統一

成果

◎教師の熱意が生徒に伝わり、学校全体が一丸となって進路実現を目指す体制が確立。国公立大には5年連続で40人以上が合格

学校存続の危機に直面し 進学校への転換を目指す

大宮開成中学・高校は、埼玉県さいたま市にある私立の進学校だ。かつては普通科の他に商業科や家政科などを擁する学校で、卒業後は就職する生徒が大半だった。1990年代に入り、大学進学への意識が社会全体で高まる中、同校の卒業後の進路は依然として就職が中心であり、それが入学者数の減少につながっていた。相馬正治教頭は、当時の状況を次のように話す。

「公立や他の私立校の併願として本校を受験するケースが多く、学校の求心力に課題がありました。また、就職指導が中心だったため、進学指導のノウハウの蓄積が少なく、短大合格者も珍しい状況でした。それらが生徒募集に影響し、県外・市外からの入学者が大半を占めていました。そして、90年代には2年連続で定員割れとなるに至ったのです」

危機感を抱いた同校では、普通科進学校への転換を図ろうと松崎洋右理事長のリーダーシップの下、改革が始まった。まず96年度、大学進学を目指す「特進クラス」を新設。受験に求められる知識を基礎から付けさせるために、授業時間は平日9時間、土曜日4時間とした。また、3教科で毎回課題を出し、次の授業では確認の小テストを行った。小テストは、課題を解いてくれば確実に得点できるように作問した。



大友堅詞

Ootomo Kenji

教職歴6年。同校に赴任して7年目。国語科主任。学年コース責任者。「矜持」。自らの力を信じ、誇りを持って切磋琢磨できる生徒を育てたい」



佐野 謙

Sano Ken

教職歴9年。同校に赴任して10年目。英語科主任。3学年担任。「教師の情熱と生徒の情熱が一体となってこそ、志望は実現できる」



阿部俊介

Abe Shunsuke

教職歴13年。同校に赴任して14年目。教務・学年コース責任者。2学年担任。「生徒には何事も自責遂行する責任感と行動力を育みたい」



落合 昇

Ochiai Noboru

教職歴36年。同校に赴任して10年目。教科科主任。3学年担任。「熱意を持って指導し、生徒と協調してより良い学習環境を作りたい」



相馬正治

Soma Masaharu

教職歴11年。同校に赴任して12年目。進路指導部長を兼務。「生徒と共に学び、成長し続けられる教師でありたい」

「どの生徒も『勉強が出来るようになりたい』」と思っています。しかし、中学時代あまり勉強をせず、学習習慣が定着していない生徒に『家で勉強して来なさい』と伝えるだけでは出来るようにはなりません。学校で課題と小テストというサイクルを徹底することに

より、生徒に『やれば出来る』という達成感を持たせ、学習習慣の定着と学習意欲向上を図りました。かなりハードだったはずですが、生徒は勉強したことがテストで解ける喜びを知り、ついて来てくれました」(相馬教頭)

そうした指導を続けた結果、99年度入試で「特進クラス」一期生の一人が埼玉大に現役合格。進学校となるべく体制作りを始めてから3年で、同校初の国立大合格者が輩出したのだった。

若手教師のパワーを生かし 学校全体を動かす

初の国立大合格は、同校に大きな弾みをもたらした。2000年度入試では東京外国語大、01年度入試では慶應義塾大や早稲田大と、難関大への現役合格者が続いた。

同校は改革を推し進め、普通科を入学時の学力に応じたコース編成とし、商業科と家政科を順次廃止することとした。相馬教頭は、教師の意識改革が進学体制を構築する上で最も重要なポイントだと強調する。

「教師が生徒の志望を実現させられる教科指導力を身に付けていなければ、進学校には生まれ変わりません。また、『進学校にしていく』という教師の意識も非常に大切です。若い先生方のパワーが起爆剤としてとても重要な働きをしてくれたと思います」

大学受験を目指すコースには若手教師を中心に配置し、専用の職員室を設けた。また、外部から受験指導経験の豊富な講師を招き、授業をしてもらった。若手教師には、時間を作って講師の授業を参観する姿が見られたという。

「教科指導の在り方を模索する若手の先生方にとって、講師の授業は格好の手本となつたようです。やがて、講師からの助言を参考にして、校内でもより良い指導を追究しようという雰囲気が生まりました」(相馬教頭)

新採で同校に赴任した英語担当の阿部俊介先生は、赴任当時を次のように振り返る。

「先生方は朝7時には出勤し、夜9時過ぎまで学校に残って、補習や授業研究に取り組んでいました。また、それに応える生徒の姿を見て、生徒の力を伸ばすために全力を尽くすのが教師の責任だと感じました」

進学校への転換が実を結び始める頃には、教科指導や進路指導のノウハウも徐々に確立され、ベテラン教師の意識も変わった。「特進クラス」設置時には反対の声もあったが、生徒が伸びる姿を見て、その後の組織改編にはほとんどの教師が賛同するようになったという。

学力向上に伴い 自学自習の習慣化を図る

進学実績が上がるにつれて入学希望者は増



自習室設置当初、利用者は3年生が中心だったが、自習する3年生の姿に影響を受け、現在は1・2年生も多くなった。自習室の利用開始時刻は朝6時30分と早いにもかかわらず、開室を待つ生徒が廊下に列を作ることもある。100人前後が集まり、自習室に入りきれないこともあるほどだ

え、生徒の志望も高くなっていった。そこで、生徒の変化に合わせて、更に改革を推し進めた。「平日に授業が9時間もあつては、学習だけになってしまい、バランスの取れた高校生活とは言えません。教師の負担も相当なものです。また、教師から教えられるだけで、自ら学びに向かう習慣がなければ、学力の伸びにも限界があります。文武両道を実現する真の進学校となるために、学習だけでなく部活動も奨励し、心身共に調和の取れた生徒を育成しようと考えました」（相馬教頭）

そこで、1日の授業時数を段階的に減らし、現在の7時間授業とした。放課後は自分で工夫して時間を使うよう指導している。

授業時数減に伴い、自学自習の習慣化を狙い

とする二つの取り組みを柱に据えた。

一つめの柱は「家庭学習進捗表」だ。5教科についてそれぞれ教材を指定し、家庭で休業中に行う学習量の目安を示した。家庭学習用のノートは、定期的に教科担当に提出させ、進捗を確認するようにした。

二つめの柱は、授業の変革だ。教材の難度を上げ、授業の進度も早めた。国語科主任の太友堅詞先生は、この狙いを次のように話す。

「自学自習の必要性を伝えるため、準備をしなければついてこれない授業を行いました。ただ、やみくもに難度や進度を上げるのではなく、予習・復習が出来ていれば確実に理解できるよう、授業を工夫しました。その結果、教師が何も言わなくても、早朝や放課後の教室で自主的に机に向かう生徒が増えていきました」

生徒の自学自習を後押ししようと、09年度には自習室（写真）を設けた。生徒から「緊張感がみなぎっていて、息苦しくなる」との声が出るほど、全員が黙々と学習しているという。

自学自習の習慣化には、先輩からの影響も大きい。同校では、志望大に合格した卒業生数人を招いて在校生に話をしてもらう「進路報告会」を開いているが、どの卒業生も予習・復習や自学自習の重要性を強調するという。

「努力して自分の夢をつかんだ先輩の言葉には説得力があり、生徒は『先輩と同じよう

に勉強すれば、自分も志望を実現できる』と思うようです。教師が百回言うよりも、先輩の一言の方が効果は絶大です」（太友先生）

また、コースごとの集会を定期的に開き、各教科担当が、受験の時期から逆算してどのような学習をすべきか、先輩が同時期に何に取り組んでいたかを伝えている。

教師同士の結び付きを強め教科指導力を高め合う

教師の指導力向上において重要な役割を果たしているのは、「マニフェスト」だ。これは、センター試験の偏差値と大学合格者数における教師の達成目標で、センター試験については5教科それぞれ「偏差値55以上何人」「60以上何人」、大学合格者数については「国公立大何人合格」「最難関私立大何人合格」というように、進路指導部が毎年4月に前年の実績を参考に設定する。

数値目標を示すことに対しては、「目標達成を意識するあまり、成績上位層にばかり手を掛けることになりはしないか」という理由で反対する声もあった。しかし相馬教頭は、次のように話す。

「本校が重視するのは、目標を達成できたかどうかではなく、達成のために何をしたらかです。客観的に分かる数値目標を掲げること

で、達成に必要な手立てが見えやすくなり、授業研究や教材研究が活性化するだろうと考えました」

数学科主任の落合昇先生は、「マニフェスト」によって教師の指導力は向上したと話す。

「目標数値はコースごとに設けられているため、生徒の学力に応じた具体的な指導方法を明確な目標の下で話し合えるようになりました。これは、3年生全員の力を伸ばすことにつながっています」

「マニフェスト」を達成する上で鍵となるのが、「VIS」だ。5教科の主任がそれぞれマニフェストで偏差値55以上を取れそうな人数の一覧表を作る。まだ結果は出ていないが自学自習にしっかり取り組み始めている生徒などを載せることが多い。一覧表にすることで、生徒の得意教科、不得意教科がすぐに分かるため、学年団はこれを基に進路指導を行う。

「VIS」は教科指導を振り返る素材としても大きな役割を果たすと、大友先生は話す。

「例えば、他教科で一覧表に挙げられているのに、国語だけ挙がっていない生徒がいたら、国語科ではこれまでの指導を見直し、いかにその生徒の学力を伸ばすかを話し合います。また、教科団は互いに『どの教科よりも生徒の力を伸ばしたい』と考えているため、一覧表から良い意味でのライバル意識を刺激され、指導力を高め合う関係が生まれています」

す

「VIS」は生徒に公表していないが、同じ大学を志望する「VIS」を各コースから集め、「東京大・数学」「一橋大・英語」というように個別大ごとの指導を行うこともある。同じ大学を目指す者同士と一緒に学ばせることで、互いに切磋琢磨させようという狙いだ。

「マニフェスト」や「VIS」によって、教科間の意見交換も盛んになり、他教科の模試の結果にも目を通すようになったと、英語科主任の佐野謙先生は話す。

「以前は自分の担当教科の成績ばかりに目がいていましたが、最近是他教科の成績にも注意するようになりました。他教科の先生方と、生徒の志望実現のためにはどの教科の力を伸ばすべきかを話し合う機会も増え、コースや学年、教科の枠を超えた教師の結び付きが強くなったと感じています」

大学受験を通じた 人間教育を目指す

さまざまな改革を推し進めてきた成果は、安定した進学実績に表れている。国公立大には、07年度入試から5年連続で40人以上の現役合格者が輩出している。

学校に対する評価も大きく変わった。入学式では、うれしそうに記念撮影をしたり、誇らかに

に校歌を歌ったりする生徒の様子が見られるようになった。近隣地域からの進学者も増え、以前はほとんど見られなかった自転車通学者が、今では全校の約4割近くになるという。

しかし課題もあると、阿部先生は話す。

「苦手科目をすぐに諦めたり、早々と受験科目を絞ってしまったりする生徒を見ると、教師としてまだまだすべきことはあると感じます。受験生である前に高校生なので、受験に必要なかとは関係なく、高校時代に身に付けておくべき知識があることも教えたと思います」

大友先生は、受験を通して精神的にも成長してほしいと話す。

「学習意欲の持続や苦手科目の克服など、受験には困難もあります。しかし、それを乗り越えた時、生徒は大きく成長しているはずです。受験勉強を通して人間教育を目指すという思いは、本校の全教師に共通しています」

相馬教頭は、今後について次のように話す。「改革に終わりはありません。進学校として成長を続けるために、教師同士が高め合う環境を更に整え、生徒の力を伸ばせる体制を作っていきます。今までの取り組みを通して、上位層だけでなく中下位層を含めた学校全体の底上げを図りたいと考えています」

大宮開成中学・高校は、進学校としての理想に向かってこれからも前進を続けていく。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

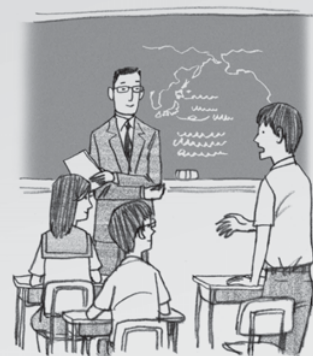
2011年4月号指導変革の軌跡「大阪府・私立桃山学院中学・高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)

30代教師の転

起
きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！



進路を実現させられなかった悔しさから
「授業で勝負」に挑み続ける

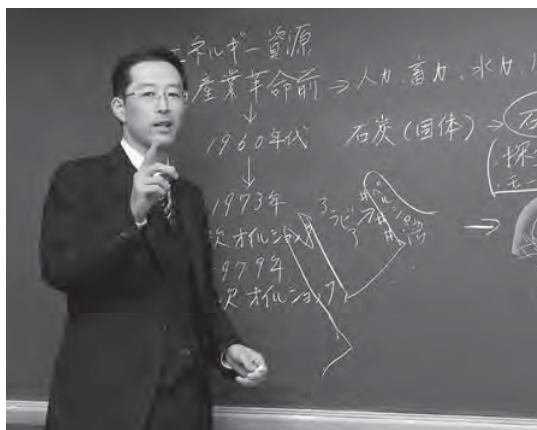
大分県立大分舞鶴高校

田所 伸先生

37歳

私が乗り越えてきたもの

教科バランスを考えられない指導



たどころ・しん ◎教職歴9年。同校に赴任して5年目。担当教科は地理。2学年担任。

大分県立大分舞鶴高校 ◎全日制／普通科、理数科／共学。11年度入試では、国公立大は、大分大、九州大、大阪大、名古屋大、東京大、東京外国語大などに計243人が合格。私立大は、立命館大、慶應義塾大、早稲田大などに延べ203人が合格。

教室にいながらにして世界の気候や地形などを把握できる地理の面白さを、一人でも多くの生徒に伝えたい。そんな思いから教師になりました。初任校では写真を多用し、生徒がその地域の様子をイメージできるような授業を心掛けました。そして狙い通り、多くの生徒が地理に興味を持ち、私は「もっと力を付けてほしい」と、演習課題の量を増やしていったのです。

結果として地理の学力は上がりましたが、彼らの大半は、希望進路を実現できませんでした。原因は、学習の教科バランスの悪さ。地理の成績を上げ

ることしか考えていなかった私は、自分の至らなさを痛感しました。「教科の力を付けさせるだけでなく、進路実現を見通した授業をすべきだった」と、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

教壇と生徒との間に溝を感じる

2校目の赴任校は県内屈指の進学校、大分舞鶴高校。私は前任校での失敗を踏まえ、「課題や補習に頼らず、授業だけで志望大に合格できる学力を身に付けさせよう」と意気込みました。とはいえ、授業時間は50分しかありません。「時間内に少しでも多くの知

識を伝えたい」という気持ちばかりが空回りし、徐々に、じつくり時間を掛けて解説する余裕をなくしていきしました。論理の飛躍があったり、自分が十分に理解していない内容を話してしまったりと、説得力のない授業になっていったのです。そのため、生徒たちは私の授業を静かに聞いてくれていたものの、発言や質問など授業へ参加する姿勢はほとんど見せませんでした。

私の立っている教壇と生徒たちとの間に、深い溝があるように感じる毎日でした。そしていつの間にか、黒板に向かって話をするような授業になっていったのです。生徒と視線を合わせるのを恐れている自分に気付き、情けなくなりました。

授業への自信を失い、生徒の顔を見られなかった

そして、これからも挑み続ける目標

生徒を引き付ける授業を模索

「進学校の生徒を引き付ける授業がしたい」。その一心で、私は自分の指導を根底から見直しました。一回の授業で生徒の関心を高められる、精選された論理的な解説を旨としたのです。授業内容を精査する視点を得るため、センター試験や難関大の過去問題を分析。20年分以上の問題を解いたのは、教師になって初めてのことでした。徹夜になる日もありましたが、疲れを感じたことはありません。「徹底的に準備して授業に臨まなければ、自信を持って授業が出来ない」と必死でした。やがて、「知識は教え込むものでは

なく、生徒に考えさせてこそ身に付くものだ」と実感した私は、一方的な解説を減らし、生徒と対話する時間を多く設けるようにしました。進学校の生徒は授業中の失敗を恐れています。それならば逆に失敗を喚起しようと考え、彼らに「思い切って失敗しなさい」と伝えたのです。そして、誤答を恐れない雰囲気づくりの過程で、「まずは私が間違いを演じよう」と考えました。

正直に言って、「本当に自分が無知だと思われているのかも」と考えたこともありました。ところが、「石油は余っているから、どんどん使おう」と言うのと、生徒が顔を上げて真剣に考えたのです。「綿密な授業準備と生徒の

様子から学ぶ姿勢があれば、授業は改善できる」と、手応えを感じました。

生徒の反応から学ぶ

授業改善の成果は、生徒の表情や様子から少しずつ感じられるようになりました。私の解説に納得してうなずく生徒が増え、授業中の発言も盛んになったのです。初めは私の質問に対する答えだけを言う生徒が目立ちましたが、今では多くの生徒が答えを導いた理由を言い添えるようになりました。

私は毎年3年生の最後の授業で、1年間の授業の感想を生徒に書いてもらっているのですが、赴任4年目の2010年度は、「先生の熱意が伝わってくる授業だった」「毎回、緊張感を持

地理の魅力と受験指導をもっと融合させたい

って出席できた」といった声をたくさんもらいました。学力の向上も見られ、最近ようやく、「課題や補習に頼らなくても生徒を伸ばすことが出来る」と思えるようになりました。しかし、現状に満足しては教師として成長できません。生徒のために何が出来るかを考えようと、若手教師中心の勉強会「MES（*）」を作り、授業スキルなどの課題について話し合っています。

地理は、選択して受講してもらう科目です。地理を選んでくれた生徒たちに、地理という科目ならではの魅力をもっと伝えたい。受験に対応できる学力を確実に身に付けさせながら、地理を得意とする生徒の知的好奇心にも応えられる授業を目指していきます。

*「Maizuru Education Seminar」の略称

田所先生 の 授業実践

Q&A



Q 地理では、データを読み取って論理的に結論を導く力も求められます。生徒の論理的思考力を育むために、授業でどのような工夫をしていますか？

A 定期考査や実力考査では、必ず論述問題を出しています。グラフや表から気候や地形の特徴を読み取る問題や、指定した言葉を使って解答する問題など、字数や傾向を変えて1回の試験に複数出しています。そのうち1題は難関国公立大個別学力試験レベルで作問。地理が得意な生徒の意欲を刺激しようという狙いです。

また、アウトプットの練習として、授業で生徒同士の討論の時間を設けることもあります。「なぜモーリタニアでタコがたくさん取れるのか」など、既習知識を組み合わせることで結論を導けるようなテーマを出題し、生徒は5人1組で話し合います。

Q 知識を定着させるために、どのような工夫をしていますか？

A 定期考査や実力考査では、答案返却後1週間以内に、不正解だった問題はもちろん、正解した問題も全て解き直しをさせています。機械的に解答欄を埋めるのではなく、出題者の意図やメッセージも読み取れるようになってほしいからです。

解き直しの際は、正解が導かれる理由を考えてノートにまとめ、提出させます。理由が分からない場合は、どこがどう分からないかを書くよう指導しています。他の生徒の参考になりそうなまとめや疑問点は、授業で紹介しています。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す田所伸先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスを自由にお寄せください。編集部より、田所先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスに
メッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

生徒の「やる気」を生かす 3年生夏休み前の意識付け

時期の特徴

部活動を引退し、学習へと切り替えようという意識はある。反面、弱点や具体的な学習方法が把握できておらず、塾任せだったり、時間を効率的に使えていなかったりする。

指導のポイント

やる気を生かすため、進路志望検討会を通じて弱点を明確化。面談や学習計画の立案を通じて個に応じた具体的な学習方法を実践させ、自学の基軸をつくる。

※このコーナーは、高校の先生方との検討会を経て制作しております。

目的別データ活用

1 7月の進路志望検討会の狙いを明確にする

……➡ 図1 (㉔全体で検討する項目)

◎7月の進路志望検討会は、生徒の志望を絞り込むためのものではなく、生徒の学力を詳細に把握し、より力を付けさせるための指導を検討する場である。学年に関係する全ての教師が生徒にふさわしい学習法、そして考える志望先を話し合う。まずは、この狙いを全ての教師が認識する。

2 狙いを達成するために必要な観点の目線合わせを行う

……➡ 図1 (㉕担任がチェックする項目)

◎進路志望検討会の内容について、学年主任や経験豊富な教師が事前に検討の観点を一覧化しておくと、赴任歴が浅い教師や3年生の指導経験が少ない教師なども、積極的に検討会に参加でき、チーム力の向上につながる。検討項目ごとに、相談先を明らかにしておくことで事後の詳細な問い合わせもスムーズになる。

3 学年で標準化し、具体的な指導に落とし込む

……➡ 図1 (㉖担任の指導例)

◎進路志望検討会で話し合われた内容を、個々の担任の指導の中で具体的にどのように生かしていくかを整理する。それを基に夏休み前後に設定されている三者面談や校外模試など個別のシーンに合わせた指導に落とし込む。更に生徒のパターンに応じた声掛け例などの共有も経験の浅い教師には役立つだろう。

対教師へのデータ

進路志望検討会の狙いを明確化し、
学年で足並みをそろえた指導を実現

データを用いた指導の流れ

6月	7月進路志望検討会	夏休み前	夏休み
◎7月実施の進路志望検討会に向けて、狙いと観点を明確化する(図1)	◎ベテラン教師、教科担任の知見なども得ながら、個々の生徒の志望からどんな学力が必要かを教科別・分野別に検討する	◎進路と学力に応じた学習内容・方法を個人面談で生徒と共有し、三者面談などで保護者に指導の方向性を確認し、具体化する	◎生徒の学習が実行できているか、登校日や課外の日などに確認し、声掛けを行う

学年目標 一つ上、一つ先の目標を生徒が最後まで貫けるようにする

7月進路志望検討会の狙い

夏休みに一人ひとりの生徒が取り組むべきことを学年団で明らかにし、各担任経由で生徒と共有できるようにする

①全体で検討する項目

1 志望校設定の成熟度を把握する

生徒の将来の目標に合致した志望校を設定できているか確認し、その志望校がしっかり考え抜かれた末の選択になっているか、生徒との面談や学力動向を基に分析する

2 志望と学力のギャップの明確化

生徒の志望と現在の学力のギャップを把握し、入試本番までに取り組むべきことを具体化する

②担任がチェックする項目

資料◎入試科目一覧、生徒記入の志望調査票 など 相談先	
 生徒の将来の志望と希望進路が一致しているか。よりふさわしい進路を見逃していないか	進路指導部
 学部志望順位や難易度の順位は適正か(例えば第1志望が工学部なのに、第2志望が医学部になっていないかなど)	進路指導部
 志望校の入試科目と生徒の履修歴にミスマッチはないか	進路指導部
最終チェック  志望校は生徒が考え抜いた大学になっているか	

資料◎ベネッセ総合学力マーク模試・6月結果帳票、FINE SYSTEM データ など 相談先	
 志望を達成するために、どの教科をどのくらい強化すべきか	進路指導部
 学習の優先順位の高い単元の具体的な学習方法にはどんなものがあるか	教科担任
 模試や校内テストの結果にはまだ表れていないが、日頃の学習方法などで学力が付いていないと課題に感じる部分はないか	教科担任
最終チェック  生徒の学力動向と弱点を具体的に把握し、志望校とのギャップを確認する	

③担任の指導例

- なぜその大学を志望するのか、どこに魅力を感じているのかを生徒自身に語らせる
- 出来る限り早めに三者面談などで保護者の希望や経済的事情なども確認しておく
- 志望校の選択肢を広げ、将来の目標に近付ける別の志望校がないか調べさせる
- 学習計画表を作成させ、学習内容と学習量を検証・共有する

- 得意な教科・科目の学習に時間を割き過ぎる生徒には、「この時期はまず弱点克服こそが重要だ」と伝える
- 学力、目標に合った問題集を選んでいるか確認する。合っていないければ学校で使用してきた教科書や問題集の中の弱点分野の基礎問題を解くように指導する
- 教科全体のスコアは高いが特定分野で課題がある生徒には、進研模試の個人成績票の分野別成績部分を示し、得意教科であっても弱点があることを気付かせる



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。

<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

どうすれば伸びるかを教科担任に聞いていく

この時期の検討会では「これからどうやって伸ばすか」にこだわりたい。「この生徒はこの分野が苦手」と状況を確認するだけではなく、「この分野について学力が足りないなら、今後この生徒にはどんな学習方法や計画が有効か?」と教科担当に具体的なアドバイスを求める姿勢が担任には求められる。

生徒の可能性を教師全員で評価する

進路志望検討会では、模試の判定だけでなく、あらゆる面から生徒の可能性を評価したい。「部活動を3年間続けた生徒は夏以降にぐんと伸びるから、このまま志望を貫かせるべき」「この生徒は文章を書くことに長けているから、小論文のある大学も視野に入りたい」など、教師の経験から想定できる生徒の可能性を共有すれば、指導の継承の場としても活用できる。

マイナスに注目する夏の指導とプラスを重視する秋以降の指導

教科学力の基礎固めが重視されるこの時期は、生徒の弱点を洗い出すべき時期。生徒は「いよいよ受験に向かう!」と夏休みを契機にこれまでの自分をリセットする気持ちになっているので、弱点を抽出した指導でも前向きに受け止めることが出来る。逆に生徒の受験への不安が高まる秋以降の時期は強みを見つけて、軌道に乗せる指導が必要となってくる。

目的別データ活用

1 学習計画立案から夏休みをシミュレーションし面談で修正する

……→ 図2

◎夏休みは教師の目が行き届かない時間が増える。一人で効率的に学び続けるとはどういうことかを実感させるために、夏休みの目標に準じた学習計画を1週間程度試行させる。学習計画の土台となる模試結果が出そろった7月上旬は、シミュレーションの絶好のチャンスだ。目標を掲げて実際に取り組むことで、さまざまな発見があるはずだ。やる気になっているからこそ、「問題集を10冊やり遂げる」など量勝負に陥りがちだが、やる気を達成感につなげるためにも自分の計画を自力で実現できるかシミュレーションさせたい。

2 夏休みを非効率に終わらせないために具体的な指導を徹底する

……→ 図3

◎学習計画の試行を終えての面談では、夏休み中の1日ごとの学習スケジュールを立てさせる。苦手教科だけではなく「どの分野が弱いのか」まで明らかにし、「何を行えば秋までに弱点を克服できるのか」を具体化するために面談を行う。具体的なアドバイスが出来るよう、クラス担任は進路志望検討会などの場も利用し、教科担任から情報を得ておく。また、難関大志望者、運動部引退者、成績低迷者など、生徒の特徴ごとに起こりがちな計画上の不備をまとめ、学年団で共有する。学年団として学習計画を検証し、生徒の効率的な夏休みの学習を応援するチーム力が求められる。

対生徒
への
データ

「学習内容計画シート」を活用し、
夏休みに一人で学ぶ力を付けさせる

データ活用の流れ

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
◎進研模試の帳票裏面から、各生徒がどの教科・科目の何の単元・分野が弱いのかを把握する	◎面談などで生徒に自身の弱点を分析させ、それに基づいた学習内容計画シート（図2）を作成させる	◎学習計画の内容に無理・無駄はないか、図3のリストなどを参考に担任が確認。面談を通じて修正していく	◎夏休み中の登校日や課外補習の日などに計画通りに学習が進んでいるか、生徒に声掛けを行う

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！ 右のウェブサイトをご覧ください。

- 2007年10月号
- 2008年6月号
- 「粘り強さを育む3年生2学期の意識付け」
- 「受験へ向けた3年生保護者への意識付け」
- 2010年4月号
- 「3年生1学期の『受験生への切り替え』と自立の一步となる志望校設定」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>

生きたデータの徹底活用

検索 クリック！

HOME→情報誌ライブラリ（高校向け）→

生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

加工可能な資料が
ダウンロードできます！

生徒指導・
進路指導ツール集

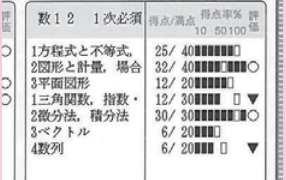
ウェブサイトから
ダウンロード！

図2 進研模試結果を活用した弱点克服のための学習内容計画シート

ダウンロード

自分の弱点	克服のための計画	月/日	午前	午後	1日の学習の目標		達成状況 (○△×)
					教科	内容	
② 数学の中でも三角関数と数列が分かっていない	③ 数学の教科書の中から三角関数と数列の基礎問題を全解く	④	9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	数学	教科書 P.0~P.10	
			9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	英語	問題集 P.0~P.10	
			9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	数学	教科書 P.0~P.10	
			9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	国語	漢字問題集 P.0	
			9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12			
	2週目		9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12			
			9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12			
			9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12			
			9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12			
			9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12			

① 参考 進研模試帳票の裏面



数1 2 1次必須 得点/満点 得点率% 評
10.50/100 105
1方程式と不等式 25/40 62.5%
2図形と計量、場合 32/40 80%
3平面図形 12/20 60%
1三角関数、指数、 12/20 60%
2微分法、積分法 30/30 100%
3ベクトル 6/20 30%
4数列 6/20 30%

■…あなたの得点率
□…目標得点率 ○…得意分野
▼…対策が必要な分野

達成状況には、学習時間が達成できたかではなく、目標に掲げている学習内容がきちんと理解できているかので○△×を記入する

活用のステップ

- ① 進研模試の帳票裏面から、どの教科のどの分野の学力が不足しているのかを検証
- ② 面談で生徒が自身の弱点を把握しているか確認し、認識できていればシートに記入させる
- ③ 弱点を克服するための計画を週単位で立案
- ④ 週計画を達成するための1日の学習計画を記入

図3 気を付けたい生徒の学習スタイルチェックリスト

ダウンロード

学習内容計画シートから見える学習スタイル	陥りがちな失敗	改善のための指導
実現不可能と思われる学習計画を立てている（学習時間、内容、量から確認）	最初の数日で挫折する可能性がある。また、気持ちだけあれば達成できると思い続け、結果、実現できずに終わる	- 無理なく確実に学習を積み重ねていくことが基礎固めにつながることを伝える - 学習は気分だけでは成立せず、地道で計画的な努力こそが必要なのだと伝えていく
得意な科目に多くの時間を割いている	苦手科目の学習を避け続け、弱点を克服できずに終わってしまう可能性がある	- この時期の弱点克服こそが志望実現のカギとなることを伝える - 教科書の中で苦手な分野の基礎問題をきちんと解くなど、具体的に指導を行う
学習内容を具体的に記入できていない	弱点分野を把握できず、非効率な学習を繰り返す	- 模試帳票の見方を面談などで確認する - 教科担任に相談し、具体的な学習法を示してもらう

ダウンロード

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）> 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

「ここからだ」と、やる気みなぎる生徒にも注意！

部活動を引退し「ここからだ」とやる気を出している生徒は気持ちが空回りして、「深夜1時まで勉強をする」「参考書を新たに購入し、全科目分を仕上げる」など、無駄な学習を進めてしまい、早期に挫折するケースも少なくない。「実現可能で、入試まで十分に間に合う計画」を面談の場で共有し、安定した気持ちで夏休みに向かわせたい。

生徒の志望を「本物」にする面談指導

この時期、志望を固めている生徒はまだ少ない。「オープンキャンパスに行ってみよう」「親が強く勧めるから」という理由で志望する生徒も多い。夏休み前の面談は「なぜこの大学を志望するのか？」「なぜこの大学に魅力を感じるのか？」と、理由を突き詰めて語らせる最後のチャンスだ。その上で夏休みに情報収集と自己理解を繰り返させ、志望を「成熟」させる。

生徒に関わる全ての教師の力を用いる

各教科担任から生徒に弱点の克服方法を直接語ってもらうのも有効だ。模試結果だけでなく日頃の授業の受け方や予習復習の方法などとの関連も踏まえているので、生徒の納得度は高い。また、夏季補習についても教科担任が「きみの弱点の単元をこの週に扱うので、その前に教科書の復習に取り組もう」などのアドバイスをすれば、夏季補習を戦略的に学習計画に取り込める。

太陽系の形成過程を分析し 他の惑星系の惑星や生命の研究に生かす

東京工業大大学院 理工学研究科地球惑星科学専攻 井田茂研究室

太陽系の外にも、惑星は存在する——。このことが観測によって実証されたのは1995年。ほんの16年前のことだ。その後、観測技術が急速に発達し、定説と考えられてきた太陽系の惑星系形成理論では説明できない惑星もたくさん存在することが分かってきた。そのため、今までの理論の見直しが急務となっている。東京工業大の井田茂研究室では、物理学の知識を用いて惑星系形成理論の再構築に挑むと同時に、生命体が存在する「地球型惑星」の有無についても検証している。

フローチャートで分かる井田茂研究室

大学院生の 主な出身分野

物理学

地球惑星科学

など

◎物理学か地球惑星科学出身者がほとんど。現在、修士・博士課程を合わせて16人ほどが在籍している。

研究にかかわる 学問分野と研究内容



◎太陽系や太陽系以外の惑星について研究するためには、地球とどのような点が違うのか、または同じなのかという視点が不可欠だ。そのためにはまず、地球や地球に住む生命がどのように誕生したかを知る必要があり、物理だけでなく、最先端の地質学や生命科学、化学からのアプローチも欠かせない。

研究成果と 社会のかかわり

宇宙観・地球観・
生命観の提供

環境問題の捉え方・
見方の提供

科学的リテラシー
の養成

など

◎地球や宇宙の解明を通して「この世界はどう成り立っているのか」という宇宙観や地球観を人々に提供することが可能になる。また、環境問題を正確に捉えるには、まず地球を理解する必要がある、その材料や考え方を提供する学問でもある。

今すべきことから逃げない姿勢が目標達成につながる

宇宙物理学が求める学生像

未知のことを知るのが好きでたまらないという人

地道な勉強や研究をいとわない人

興味のあることに100%のエネルギーを注ぎ込める人

研究者になることは簡単ではありません。多くの人が何年もアルバイトをしながら研究員を続けています。私も、「博士号を取得しても研究者のポストがないかもしれない」と将来への不安でいっぱいでした。貧乏生活は長かったですが、それでも研究を続けてこられたのは、この研究が好きだったからです。物理の知識を惑星誕生のストーリーにつなげていくことが、楽しくて仕方なかったのです。

今でも、研究が成果に結び付かないことは多々ありますが、それを苦労だとは思いません。むしろ、簡単に答えが出たら面白くない。地道な研究のプロセスが楽しいと思います。

私は、人が持っている才能にはさほど変わりはないと考えています。大切なことは、持っている才能を100%引き出すエネルギーを、自分自身で持てるかどうかです。そのエネルギーの源は何かというと、やはり「好き」という気持ち、「未知のことを知りたい」という思いではないでしょうか。それがあれば、地道な学習や研究もいとわずに続けられると思います。

高校生へのメッセージ

部活動でも学習でも、興味のあることには100%の力を出し切って打ち込んでください。そこで得た力は、この先、興味の対象が変わったとしても必ず生きてきます。また、大きな目標を達成するには、今すべきことから逃げないことも大切です。面倒で地味なことにも背を向けず、全力でぶつかってほしいと思います。



井田茂 教授 Ida Srinigern

東京工業大学理学部地球惑星科学科教授。東京大学大学院理学研究科地球物理学専攻博士課程修了。東京大教養学部助手、東京工業大学地球惑星科学科助教授を経て、2006年から現職。専門は太陽系及び系外惑星系の起源と進化の理論研究。2006年度に日本天文学会林忠四郎賞を受賞。共著に『宇宙は、地球であふれている』（技術評論社）、主な著書に『系外惑星』（東京大学出版会）、『異形の惑星』（NHK出版）など。

研究概要

惑星の形成過程を 仮想空間での実験で 解き明かす

私の研究室では、太陽系と太陽系の外にある惑星（系外惑星）の研究を行っています。惑星研究には大きく分けて観測と理論研究があります。

私は、惑星の形成過程や、惑星の多様性について理論面から研究しています。

主な研究手法は、基礎物理を使ったコンピュータシミュレーションです。仮想空間上で、例えば「小天体が惑星になるまでの成長過程」をプログラミングします。このプログラムそのものが実験装置となります。実験したい現象を正しくシミュレーションできるかどうかは、正確なプログラミングや適切な条件の設定にかかっています。そして、出てきた結果を分析し、惑星系形成理論を構築していくのです。

実は、太陽系以外にも惑星があることと実証されたのは1995年のことです。それまでの惑星系形成理論は、太陽系の形成過程を説明する研究でした。しかし、観測技術の発達によ

り、現在は系外惑星が次々と見つかっています。しかも、それらの惑星には太陽系と全く異なる性質を持つものも多くあります。例えば、ホット・ジュピターと呼ばれる木星のような巨大惑星は、中心星の近くを高速で公転しています。また、太陽系の惑星のように円を描いて公転するのではなく、楕円を描くエキセントリック・プラネットという惑星もあります。太陽系しか知らなかった研究者の常識が次々と覆えられているのです。

これまでの惑星系形成理論を再度検証し、系外惑星の形成にも適用できる理論を再構築することが必要となっています。

研究を志したきっかけ

この世界の仕組みを 知りたいという 思いが根底に

私がこの分野を目指すようになったのは、高校時代です。「自分が存在している世界のことを知りたい」という気持ちが強く、哲学書をたくさん読みましたが、ピンときませんでした。そんな私に指針を与えてくれたのが物理でした。理科は苦手

したが、物理だけは世界を解き明かす手掛かりを示してくれるような気がしました。高校2年生の時、宇宙論を研究している京都大の先生の記事を読んでこの道に進もうと決心し、京都大理学部に進学しました。

その後、宇宙論の研究者を目指して大学院を受験しましたが、宇宙論関係は全て不合格。唯一合格したのが、それまでほとんど勉強したことのない地学をメインに研究する地球物理学科でした。しかし、宇宙への思いは諦めきれず、その中でも「一番宇宙っぽい」と感じた太陽系を扱う研究室に所属。実際に研究を始めてみると予想以上に面白い分野でした。当時は太陽系形成の大枠は分かっていたものの、詳細は未解明のままでした。そこで私は、惑星研究の出発点である地球誕生のストーリーをコンピュータシミュレーションで解明する研究に没頭したのです。

地球が成立するまでに何が起きたのかを科学的に検証しながら解き明かす過程は、「地球の歴史学」を学ぶようなものです。実は、今でも分かっていないことが多くあります。例えば、地球はガス円盤の中で生ま

れたのですが、理論計算によると、円盤の中の地球は十万年以内で太陽に落ちていくことになり、地球は存在できないことになってしまいます。これらの謎を解明すべく、日々、研究を進めているところです。

科学者は、言葉は通じなくても、実験結果のグラフを共通言語にして理解し合うことが出来ます。一本のグラフから同じ宇宙の姿を想像し、世界中の研究者と議論できる。これも研究の醍醐味だと思います。

現在の研究テーマ

銀河に充滿する 地球型惑星、そして 生命の存在を追求

ここ数年、地球と同じ、岩石で出来た「地球型惑星」が多く発見されています。これまでに太陽系の研究で培ってきた知識は、この地球型惑星の研究にも生かされています。未開拓の研究分野で、新たな理論をつくり出すチャンスが訪れているのです。

実際の観測データとコンピュータシミュレーションによる実験を照合すると、銀河系にある恒星の約10%に、海を持つ地球型惑星があると推測できます。

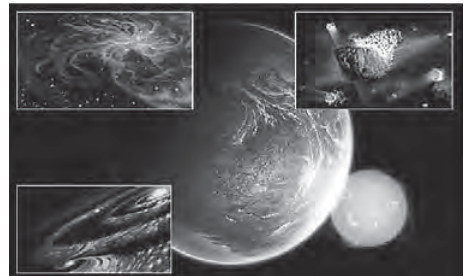


写真 太陽系の惑星は、ガス円盤の中で小天体が衝突・合体することで形成される。系外惑星の形成過程について説明する理論については、現在構築中だ

そこで私たちは今、地球はなぜ生命を持つ惑星になったのかを探り、

その研究を基に太陽系以外の地球型惑星の組成や生命が存在する可能性を分析する研究を進めています。最新のナノテクノロジーを使った地質学で岩石から30億年前の地球の環境を読み取ったり、ゲノムの配列から生命の進化の過程を明らかにしたりと、さまざまな学問の最新知識や技術を生かしています。

この世界はどのように成り立っているのか。これは、人間がずっと追い求めてきた問いです。宇宙や地球外生命について解き明かすこの分野は、人々に「世界観」を提供する学問といえるのではないのでしょうか。

用語解説

① 系外惑星

太陽系以外で恒星の周りを回る惑星のこと。1995年に初めて発見された系外惑星は、ペガサス座51番星の惑星。

② ホット・ジュピター

木星程度の重さでガスで出来た惑星のうち、中心星に極めて近く、公転周期が一週間以内というようなもの。太陽系では、比較的小さな水星や地球などの惑星が太陽の近くを公転し、木星や土星などの大きな惑星はそれよりも遠く離れたところを公転している。太陽から遠い惑星の表面温度は、マイナス110度以下にもなる。しかし、ホット・ジュピターは、地球と太陽間の十分の一という近い距離を公転しているため、恒星が太陽と同じ明るさだった場合、表面温度は数百度を超える。公転速度も早い。

③ エキセントリック・プラネット

系外惑星の一つ。太陽系の惑星は、円に近い状態で公転するが、エキセントリック・プラネットは、楕円を描いて公転する。公転時は恒星からの距離の変動が大きい^{しどろもどろ}ため、灼熱期から極寒期まで、気候変動が非常に激しい。

地球型惑星の形成過程を地球と比較しながら研究



立浪千尋さん
Tachinami Chihiro
東京工業大大学院
理工学研究科地球惑星科学専攻
博士前期課程2年
(富山県立高岡高校卒業)

Q **なぜこの分野に進んだのですか**

A 高校3年間は野球部に所属し、大学ではブレイクダンスに打ち込みました。物理は好きだったものの、勉強は二の次という生活を送っていました。ところが、大学2年生の時にふと、「野球もブレイクダンスもうまく身体を動かすためには、物理の法則に則った動きをすればいいんだー」と気付いたので。物理の理論と自分の身体感覚が初めてマッチして、物事を物理的に

に解釈する楽しさを実感しました。それを境に、物理を真剣に勉強したいと考えるようになったのです。

東京工業大には物理学科もありますが、1年生の時に受けた地球惑星科学の授業で、「いろいろな基礎物理を組み合わせて、惑星が出来る過程を研究する」というスケールの大きさに引かれたこともあり、地球惑星科学科を選択し、そのまま大学院に進みました。

Q **現在の研究内容を教えてください**

A 太陽系の外にあり、地球に似た惑星である地球型惑星が出来た過程を、地球の形成過程と比較しながら研究しています。惑星の形成には惑星を冷却する過程が欠かせませんが、冷却の過程で惑星内部にどのような対流が発生するか、その対流が磁場や気候など惑星の表面活動にどのような影響を与えるかなどをコンピュータシミュレーションで実験・分析しています。

地球型惑星を研究していると、自分が住んでいる地球のことがより理解できるようになります。コンピュータの入力条件を少し変えたただ

けで、全く地球と異なる星が出来ることもあり、地球がいかに特殊な星なのかを実感しています。一方で、「第二の地球」が存在するかもしれないという可能性を追究する面白さもあります。地球型惑星の研究は今、惑星研究分野の最先端にあり、それを自分が研究しているのだと考えると、研究にも熱が入ります。

将来は研究者になりたいと考えていますが、研究者に必要なことは誰も気付いていない問題を見つけ出す問題発見能力だと思います。仮説を立て、実験や分析を繰り返す中でこの力を磨いていきたいです。そして、生涯を通じて「地球がどれだけ特殊なのか、または普遍的なのか」を解き明かしたいです。海外でも研

究をしてみたいですね。

Q **高校生へのメッセージをお願いします**

A 高校時代は野球、大学ではブレイクダンス、今は研究と対象は変わりましたが、どれも全力で打ち込んできました。これらの経験で分かったことは、「何事もだらだらやっても楽しくない。真剣にやればやるほど楽しいし、成長も出来る」ということです。

皆さんには興味のあることは何でも挑戦してほしいと思います。失敗することもあります、そこから学ぶことも多いです。本気でやればやるほど、失敗しても「次はどうすればうまくいくか」を楽しんで考えられるようになります。

私の高校時代

その時できることに全力を尽くす

●高校時代は野球に明け暮れた3年間でした。一番の思い出は、高3の夏の最後の試合です。県大会のベスト8を決める試合で、その年の甲子園出場最有力候補と対戦しました。4回までは6対0で完敗ムード。ところが5回で2点を返した後、1番バッターが満塁ホームランを打ち、ついに同点に追いついたのです。「これはいける!」とみんなの期待が高まりました。接戦の末、味方のチームのピッチャーが指をけがしてしまい、1点取られて負けてしまいましたが、「一丸となってやりました」という思いがありました。後悔はなく、スッキリした気持ちでした。

高校時代は野球のことしか頭になく、今の自分は想像も出来ませんでした。でも、その時々で、取り組んでいたことに全力を尽くしていたからこそ、今があるのだと思います。皆さんも、好きなことには手を抜かず、目の前の時間を大切に過ごしてください。

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



今号の視点

学問と社会の関連を意識させ 学習意欲を高めている理工系学部

理工系の学部は文系に比べて専門分野が明確であり、卒業後の進路もイメージしやすい。しかし、ここ数年、理工系学部でもキャリア教育に力を入れる動きが見られる。大学院進学者も多い中、学士課程でキャリア教育を行う意義は何か。内容と成果を併せて、二つの事例を紹介する。

学問の専門性と共に求められる 課題解決力、チームワーク

2011年度から、大学・短大での「職業指導」（キャリアガイダンス）が義務化された。新卒者の就職率の低下や、就職後3年以内の離職率の高さに歯止めをかけようと決定されたことであるが、多くの大学は以前からこのような現状を十分認識し、キャリア教育に力を入れて取り組んできた。

ここ数年の動きで注目したい点は、理工系の学部でキャリア教育

に注力する大学が現れていることだ。その背景には、企業が理系の新卒者に求める資質にある。日本経済団体連合会の調査結果によると、技術系・理科系の大学・大学院教育に期待することの上位三つは、「論理的思考や課題解決能力を身につける」「専門分野の知識を身につける」「チームを組んで特定の課題に取り組む経験」であった（図1）。専門性と並んで、課題解決能力やチームワークの経験などを、採用時に重視していることが分かる。また、「専門分野に関連する他領域の基礎知識も身につける」

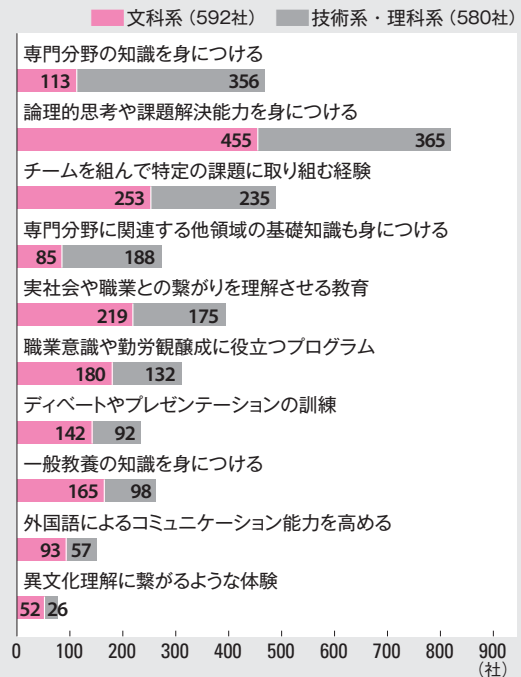
も約3割の企業が大学・大学院教育に期待している。企業としては、専門領域の研究に没頭するだけでなく、組織の一員として課題解決に尽力できる人材を求めているといえるだろう。

更に注目したいのは、技術系・理科系の大学・大学院教育に対しても、「実社会や職業との繋がりを理解させる教育」を期待する企業が約3割、「職業意識や勤労観醸成に役立つプログラム」を期待する企業が約2割あることだ。一般的に、理工系学部は専門分野が明確であり、大学での学びと社会との

かわりや、卒業後の進路がイメージしやすい。にもかかわらず、企業は、学生に大学での学びと社会の結び付きをもっと理解し、職業意識を高めてほしいと考えている。理工系の学部でキャリア教育を取り入れる動きが見られることは、企業のそうした要望に応える施策の一つといえるだろう。そこで、文系学部に比べて必修科目が多く、また大学院進学者が多い中、大学はどのような目的意識を持ち、学生の視野を広げるような取り組みを工夫しているのか。二つの事例を紹介する。

図1 大学教育に期待するもの

文科系・技術系・理科系の大学生・大学院生を採用する立場から、大学教育に期待するもの



*複数回答

出典／日本経済団体連合会「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果」
調査期間は2010年9～11月、調査対象は日本経済団体連合会会員企業、ほか地方別経済団体加盟企業

1年生での丁寧な支援が 4年間の学びの土台を作る

電気通信大「電気通信大学概論」及び
「キャリアデザインA・B・C」

◎課題意識と狙い

電気通信大は、情報技術系の単科大であり、高い就職実績を誇る国立大だが、近年、学生の将来への意識が希薄になってきたことに危機感を抱いていた。教育戦略担当の福田喬理事は、次のように説明する。

「本学は、1、2年は必修科目がほとんどで学生の履修負担が大きく、気を抜かずに取り組む必要があります」

す。しかし、この数年、職業意識や目的意識が低い学生が目立ち、4年間で卒業できないケースが増えました。また、消費者としての意識だけでなく、産業構造や社会構造に目が向いていない点も気になりました」

1、2年生の授業の中心は数学や物理などの基礎科目だが、それらを高校の授業の焼き直しと捉えるのではなく、最先端技術の土台であり、将来の目標への経路として学ぶことを学生にきちんと理解させる必要性があった。その方策として、社会に目を向け、将来の自分を考えさせるキャリア教育を始めた。

◎取り組み内容

特色は、1年生の「電気通信大学概論」「キャリアデザインA」にある。前者は経営者の講演や企業見学により最先端技術を見せることで学びへの意欲を高め、後者は自己理解のワークシートや適性検査などを中心に行い将来像を描かせる(図2)。いずれもその日のテーマについて少人数でディスカッションし、学んだことを200字以内のレポートに提出する。1年生からアウトプットの訓練を積むという意図もある。

これらの授業で重要な役割を果たすのがTTA(*1)だ。1人が学生10～20人を担当し、出欠やレポート提出の管理、グループ活動の進行などを担う。主に定年退職後の管理職経験者が、交通費と若干の謝礼の有償ボランティアとして従事。総勢約50人の平均年齢は66歳だ。共通教育部の竹内利明特任教授は、TTAの存在は1年生にとって重要だと話す。

「TTAにはレポートにコメントをしたり、遅刻者に注意を促したりと、学生を丁寧に支援してもらっています。本学の調査結果では、新卒

図2 電気通信大のキャリア教育の流れ(2010年度)

1年生	電気通信大学概論 (2単位) ・企業人の講演や企業見学、少人数のグループワークを行う ・社会や企業の構造を理解し、技術者の役割を知る キャリアデザインA (2単位) ・企業人の講演や少人数のグループワークを行う ・自分を見つめ直して理解を深め、将来像を思い描く
2年生	キャリアデザインB (2単位) ・企業人の講演、ディベートなどを行う ・仕事を含む人生そのものを考える ・考え抜く力、コミュニケーション能力を高める
3年生	キャリアデザインC (2単位) ・少人数のプロジェクト形式により、課題発見から解決まで行う ・技術開発に必要な基本的素養を理解し、体験的に身に付ける

*大学の資料を基に編集部で作成

者の採用は4年間の成績と相関があり、4年間の成績は1年生前期の成績と相関がありました。そこで、1年生の最初に手を掛けて授業をきちんと受けさせ、大学での学びの土台をしっかり作りたいと考えました」

情報・通信工学科(*2) 2年の高村成道さんは、「大学の勉強だけで就職できるか不安でTTAに相談したところ、『学びの場所は授業だけではない』とアドバイスを頂き、視野が広がりました。その後、教授に相談し、ベンチャー企業でサー

*1 Team Teaching Assistant の略

*2 電気通信大は2010年度に改組したため、3年生以上は電気通信学部情報通信工学科、2年生以下は情報理工学部情報・通信工学科となっている

バー管理業務のアルバイトを始めました」と話す。

2年生の「キャリアデザインB」では産業構造への理解を深めさせ、3年生の「キャリアデザインC」では同じ課題意識を持つ学生がチームを組み課題解決に挑む。情報通信工学科4年の高石学さんは「今は基礎研究であっても、プロジェクト形式で進めるのが主流です。この授業ではプロジェクトの回し方をはじめ、研究で必要となる力の下地を作るこ

◎成果と課題

学生のアンケートには「早めに現場を知ることと授業と社会とのつながりを実感できた」「ワークショップ形式の授業が面白い」といった声が多く寄せられ、学生の出席率も高い。そうした成果を受け、11年度には「キャリア教育演習」として必修科目とし、1年生と3年生が混在する少人数グループで進める形に発展させた(12年度までは1年生のみ)。各クラスには教員1人を「担任」として配置し、TTAと協力しながらきめ細かな指導を行っていく。

「担任制には異を唱える声もあり

ます。しかし、1年生のキャリア教育では学生の視野を広げ、学びへの動機付けを行うべきと考え、しっかりと手を掛けられる担任制を取り入れることにしました」(竹内特任教授)

段階的なキャリア教育で就職への目を開かせる

龍谷大理工学部
キャリア教育

◎課題意識と狙い

理工系は専門性が高いからこそ、目的意識を高めて学習意欲に結び付けたいという課題は、他大学にも共通する。学部卒業後に約7割が就職する龍谷大理工学部では、全学的な就職支援の他に、学部独自のキャリア教育を1年生から行う。同学部キャリア開発主任の塩見洋一教授は「近年、本学や理工学部を志望した理由を言えない学生が目立つようになり、大学入学が最終目的になっていて、入学後に何をするのかが見えていない。そうした学生に目的意識を芽生えさせるのが、本学部のキャリア教育の狙いです」と話す。

◎取り組み内容

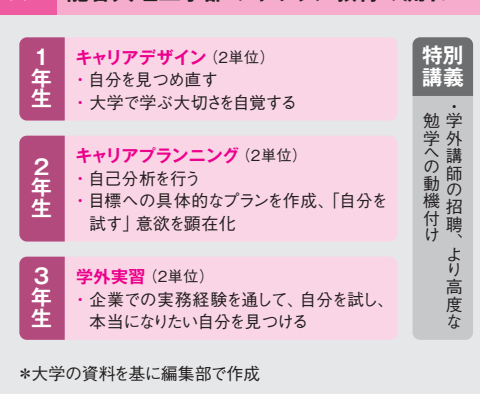
同学部のキャリア教育は1～3年

生で段階的に行う(図3)。1年生の「キャリアデザイン」では「自分は何者か」「大学生活をどう過ごしたいか」を考えさせ、自己理解を深める。そして、2年生の「キャリアプランニング」で社会構造と職業の多様さを理解させつつ、自分の将来を考えさせ、3年生で本格的に始まる専門教育の科目選択に結び付ける。

機械システム工学科4年の近藤臣斗さんは、「授業を受けるまでは将来について友だちと面と向かって話し合うことはほとんどありませんでした。就職に迷っていたのですが、『自動車関連企業に入りたい』など目標に邁進している人の話を聞け、大きな刺激を受けました」と話す。

キャリア教育の最終段階は3年生の「学外実習」だ。夏休みに3週間、約300人の学生が200以上の企業・研究所で実習を受ける。機械システム工学科と物質化学科はものづくりに直結する学科のため必修科目とし、他の4学科は選択科目となっている。実習先は地元の中小企業の協力を得ている。機械や電子機器などの製造業が中心であり、ネジの製造や金属加工といったB to B

図3 龍谷大理工学部のキャリア教育の流れ



(*3)の企業など多種多様だ。実習先は希望通りにならないこともあるが、社会にはどのような仕事があり、そこで社員はどう働いているのかを体感した学生は、自分の将来と真剣に向き合うようになるという。「就職状況は厳しいにもかかわらず、学生は自分が知っている企業にしか目が向いていません。例えば自動車を作るにしても、タイヤやハンドルなどの部品があり、金属板を車体用に加工作る必要があることを、なかなかイメージできないのです。就職活動を控えた3年生の夏に企業で実習を行うことで、学生の目を開かせ、就職に向けて視野を広げさせ

*3 Business to Business の略。企業間の取引のこと。企業と一般消費者の取引はB to Cという

企業見学を契機に 漠然としていた夢が具体化



電気通信大電気通信学部
情報通信工学科4年
有北知弘
(和歌山県・近畿大学附属和歌
山高校卒業)

本学を志望したのは、情報技術に関心があり、東京の大学で学びたかったからです。具体的にやりたいことは決まっていなかったのですが、「キャリアデザイン」の授業をA、B、Cと受けて、次第に目標が固まりました。

最初の転機は「キャリアデザインA」での企業見学です。私はパイオニアの工場とソニーの本社を訪れました。工場では音響機器の生産ラインを見学し、安全基準の重要性などを聞きました。ソニーでは当時開発中のLEDの液晶テレビを見せていただき、薄型が実現できた理由などを聞きました。これを契機に音響や映像に関心を持つようになり、「キャリアデザインC」では日本無線の協力を得て学内でのワンセグ放送を実現させました。本学の知名度を上げるためにどうすればいいかという課題意識から出発し、企業に技術協力をお願いしたり、コンテツを制作したりしました。大学院進学を予定していますが、院では研究が中心となるので、学部生のうちにキャリアについて考える機会があったのは良かったです。

企業での実習で ものづくりの面白さを実感



龍谷大理工学部
機械システム工学科4年
佐藤雅也
(滋賀県立甲西高校卒業)

メーカーに勤めている父の影響で、私もものづくりの仕事に就きたいと思いい、機械系の学科を選びました。しかし、キャリア教育の授業で同級生の将来像を聞くうちに、自分の考えが漠然としていることに気付き、将来について真剣に考えるようになりました。

学外実習では、業務用冷蔵庫ショーケースを製造する企業に行きました。既存製品の省エネ化に向けて、庫内の風向きや温度を計測して改善点を探り、製品を改造して実験するという商品開発を、社員に付いて行いました。テストでは実際の使用状態と同じにするため、3分ごとにドアの開閉を3時間行いました。「より良い物を作ろう」という社員の意欲に触れ、ものづくりの面白さや意義を改めて感じました。実は、その後の授業でCPU(*4)冷却用のフィンの設計・製作・実験があり、それがまさに学外実習での経験と同じ過程でした。安価で効率が良いものを作るために、設計・製造し、実用化に向けて製品実験を重ねる。作るものは違っても過程は同じだと実感しました。

することも狙いとしています。4年生で所属する研究室を選ぶ上での良い経験にもなっています」(塩見教授)

◎成果と課題

多くの学生は、授業で学んだことが現場でどう生かされているかを経験し、働くイメージを具体的に持つようになるという。また、アルバイトとは違う「働く」経験は、企業がどういう所かを肌で感じる機会であり、大きな刺激となっている。しかし、学生の自主性はまだ足りないと感じている。

「11年度はアメリカにある日系企業で学外実習を行う予定です。たとえ何も出来なくても、世界を肌で感じ、より大きな目標を持つてほしいと考えています」(塩見教授)

進路指導に生かす

専門性が高いからこそ 目的意識の醸成に工夫が必要

電気通信大と龍谷大とでは、教育環境や卒業後の進路などが異なるものの、課題意識は同じである。1年生から自己分析をして将来像を思い描かせ、考えるための材料として企業人の講演や企業見学を行い、少人数でのグループワークを積み重ねていく。これらの活動は、目的意識の醸成だけでなく、働く上で必要とされるコミュニケーション能力やチームワークを高める効果も期待できる。

理工系学部では、1年生から学習を積み上げることが重要であり、専門科目の土台となる基礎科目を入学後から学ぶ。それらの科目は大半が必修であり、学生にとっては日々の授業をこなすだけで精一杯になることが多い。それだけに、将来に向けての視野を広げたり、今の学びが将来どのように結び付くのかを体験させたりして、学習の目的意識を持たせるための工夫が必要だといえる。

「大学教育自体がキャリア教育である」という考えもあるが、専門教育に特化し、また授業がハードな理工系学部だからこそ、「どのような動機付けがなされているか」「目的意識を持たせる工夫はしているか」という教育方法にも注目したい。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎ 今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。

e-mail:

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

*4 Central Processing Unitの略。コンピュータの中央処理装置

私たちの思い、私たちの決意」

とともにありたいと願い、新たな学びへと向き合う8人の先生の言葉を紹介する。

◎被災地の先生方の生徒たちへの思いと力強い言葉に感銘を受けました。私は前任校で震災を経験しました。考査の午後学校に残っていた生徒たちの安全を確保し、無事に帰宅させるため、臨機応変に的確な行動をとる先生方と、恐怖の中でも冷静さを失わずに行動していた生徒たちの姿が目に残っています。先生方と生徒たちの底力に感心させられました。生徒たちの力強さを信じ、教育を通じて新たな日本の創造に役立てることを誇りに感じながら、共に頑張っていきましょう。

銚子市立銚子高校 田中三郎

◎多くの未来ある子どもたちの命を奪い取った今回の大震災に心を痛めています。大きな悲しみと混乱の中で教育に立ち向かう先生方の言葉を読み、生徒とともにあろうとする姿に感銘を受けました。生徒たちに寄り添い、ともに悩み考えることが教育の原点であると改めて教えられた気がします。被災地の悲惨な状況を映像で見るたび、一教育者として何ができるかと考えざるを得ませんでしたが、どんな状況下であっても、希望を捨てない、生徒とともにあろうとすることが教員としての使命だと確信しました。

富山県立高岡高校 城岡朋洋

◎東日本大震災は被災地から遠く離れた広島の高校生にも強い影響を与えた。免震構造を深く研究したい、災害に強い街づくりを学びたいなど、将来の研究テーマに言及する進学決定者も現れた。社会においていかに自己実現を図るかが進路の目標であるならば、人のため社会のためと思うことは自己実現の強い推進力となり得る。未曾有の震災に正面から向き合い、自らの将来像を重ねようとする高校生をみると、幾多の困難に挑み未来を切り拓く次世代を育てることこそ高校教育に求められる不変の課題である。

広島市立基町高校 田中伸二

◎20年前、島原半島は雲仙・普賢岳噴火に伴う火砕流と土石流による災害で、学校生活の日常性は失われてしまいました。多くの生徒が避難生活を余儀なくされました。その困難を克服したのは地域の潜在力と生徒たちの真の力でした。その時だからこそできる教育も徹底しました。翌春、島原高校の進学実績は空前の好結果でした。

東日本大震災の大災害、お見舞い申し上げます。私たちは東北地方の底力と生徒の力を信じています。苦難を乗り越えた先にある、確かな夢の実現を心から祈っています。

いさはやコンピュータカレッジ 久原巻二(元長崎県立島原高校)

ベネッセ東北支社社員より「今、私たちが思うこと」

◎地震発生時、高田高校にお邪魔しておりました。避難した裏山のグラウンドでは、厳しい環境に負けない生徒たちがいました。「運動部ですから」と言い誰よりも動く生徒、たき火に当たる場所が無いと分かると雪の降る夜に、暖の無い部室で過ごす生徒、おにぎりを分け合う生徒、「素晴らしい生徒だ」と涙が出ました。その様な岩手県の生徒の未来のため、ご指導される先生方のお力になれるよう、全力を尽くします。(岩手県担当・森本典生)

◎学校訪問前は「迷惑ではないか?」と不安がありました。しかし、先生方は笑顔で迎えてくださいました。「普通に接してください。特別なことをされても困るから」と。先生は「授業を受けたり、友達と笑ったり、先生に叱られたり。そんな当たり前の日常を取り戻したい」と話してくださいました。私は「特別」なことは出来ないかもしれませんが、ただ、私に出来ることを丁寧に、少しでも学校の日常に役立てばと思います。(宮城県担当・柏崎亮太)

◎この度の震災で被害を受けられた先生方、生徒の皆様には心からお見舞い申し上げます。福島県内のある学校で、校舎が使用出来ない中、困難な状況に耐え、ご指導される先生方、学ぶ高校生の姿に感

銘を受けました。福島県担当として、福島県が震災を乗り越え、さらなる発展を遂げるお手伝いが出来るよう尽力する所存です。福島県の未来の礎となる高校生を、先生方とともにサポートできる仕事に誇りを持って取り組んで参ります。(福島県担当・寺尾岳大)

◎震災で被害を受けられた皆様に謹んでお見舞い申し上げます。新学期の非常にお忙しいところ、弊社担当者への訪問に日々ご対応いただき、誠にありがとうございます。お伺いする度にたくさんの先生方からご依頼を頂いております。今年度も生徒さんの希望進路実現と、そのための先生方のご指導のお手伝いを精一杯させていただきます。(東北支社 営業統括・丸尾徹)

◎震災直後、先生方自身が大変な状況にも関わらず、進学についてなど生徒のために必要な情報のお問い合わせを本当に多くいただきました。そして最後には必ず、私ども東北支社や営業担当者を気遣う言葉をかけて頂きました。この場を借りまして深く感謝を申し上げます。今もただ眼前の生徒を見つめ日々のご指導にまい進されている東北地区の先生方のお役に少しでも立てるよう、私たちもしっかりと前を向き行動して参ります。(東北支社長 馬場 尚征)

全国の先生方から被災地の高校へ

このたびの東日本大震災を全国の高校教師はどのように受け止めているのか。被災地

◎この度の大震災で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。本校のある奥尻町も18年前に発生した北海道南西沖地震で甚大な被害に遭いました。全国の皆様の温かいご支援によって今では以前の豊かな自然を取り戻し、生徒たちは故郷を誇りにし、生き生きと学校生活を送っています。厳しい現実の中で途方に暮れることばかりでしょうが、今こそ学校が子どもたちの力を信じ、子どもたちと地域のために教職員の皆さんの持てる力を発揮する時です。諦めない気持ちを皆さんに教えてあげてください。

北海道奥尻高校 野村俊夫

◎みちのくは遥か太古の昔から、何度も自然の猛威に曝されてきた。しかし、その度に未来を凝視する勇気と英知を駆使し、何度も立ち上がってきた。その魂の何ものにも代えがたい人々の強靱な意志を、私は誇りに思っている。今こそ東北人の粘り強く決して困難に屈しない勇気の在り処を、新たな時代の構築のために示そうではないか。そのためには我々はいかなる援助も厭わない。学校は校舎ではない。そこに生徒と教師がいて、志があれば「学校」は生きる。同じ東北人として心から魂の再生を祈っている。

群馬県立前橋東高校 山口和士（東北出身）

◎私の学校は、英国ロンドンのセント・ポールズ校と姉妹校協定を結んでいます。そちらの校長先生から震災後すぐに次のようなメールを頂きました。「多くの犠牲者の皆さんに深い悲しみを抱きました。しかし、日本は強い国です。必ずや立ち直ると確信しています」と。

私はこれを全校生徒に伝えるときともに、日本人の「どんな困難にも負けない凛とした姿」、「真摯に努力する姿」を改めて生徒に訴えました。世界が日本を応援しています。私たちの気持ちは一つです。私の学校も頑張ります。

愛知県立時習館高校 林 誉樹

◎私が経験した阪神淡路大震災から16年経った今振り返ると、いろいろなことがよみがえります。その中で、学校の先生として一番すべきことは、生徒の出口指導だと思います。震災で変わったかもしれない夢でも、生徒のその夢をかなえるために、環境に合わせて勉強が出来るような対策や、奨学金の情報など、学校が出来ることを生徒に発信してください。目の前のことだけでなく、長いこれから先のことを考えて生徒に接してください。最後に、生徒を引っ張る先生方が潰れないように気を付けて頑張ってください。

兵庫県立神戸高校 森川喜一

VIEW21 2011 September 9月 Volume 3

次号は8月24日発行(予定)
[VIEW21] 高校版は年6回の発行です

VIEW21 6月号 Vol.2

2011年6月6日発行

発行人 新井健一
編集人 原 茂
発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター
印刷製本 (株)ビーヴィーコーポレーション
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸満
撮影協力 田中秀和、南弘幸、ヤマガチイッキ
イラスト協力 山本重也

VIEW21編集部
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階
電話 03-5320-1287

©Benesse Corporation 2011

編集後記

◎6月号の取材がピークを迎えようとする時、今回の地震が起きました。各地の状況が明らかになり、私たちが今やるべきことは、VIEW21を発刊することなのか、と思ひ悩みながら、今日に至りました。その中で「VIEW21を出すことが我々の果たすべき使命だ」と決意させてくれたのは、被災地の読者の先生方から届いた学校新聞や、先生方の思いが伝わったメールや FAX でした。情報誌を通して出来ることは何か。知恵を絞って考え続けていきたいと思います。(小林)

◎未曾有の震災の直後、いったい自分に何が出来るのか途方に暮れました。しかし、先生方と誌面をつくっていく過程で、これまで通り VIEW21を通じて全国の学校と学校がつながるお手伝いをするこそ、私たちのすべきことだと感じるようになりました。先生方の励みとは、生徒の成長と、想いを同じくした先生同志の声であると信じています。情報誌に携わる者として、また一人の日本人として、自分に出来ることを問い続けていこうと思います。(佐藤)

◎「頑張るしかない。生徒は勉強するしかないのです」。何故勉強をしなければいけないのか。その答えはとてもシンプルでした。そこには、震災があっても変わらない教師と生徒による「教育」の営みがありました。あらゆる付加価値がそぎ落とされても、教育の中でもっとも大切なものだけは、強い光を放ちながら、確かにそこに存在していました。(小泉)